



Title	国語動詞の活用（語形変化）
Author(s)	城田, 俊
Citation	北海道大学人文科学論集, 16, 123-152
Issue Date	1979-03-21
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34342
Type	departmental bulletin paper
File Information	16_PR123-152.pdf



国語動詞の活用（語形変化）

目次

外容の組立て方の主な仕組

(一) 語彙語幹と助辞

(二) 語尾助辞と語幹助辞

(三) 語幹助辞

(四) 語尾助辞—尾助辞と接尾助辞

(五) 語幹—子音語幹と母音語幹

(六) 母音助辞と子音助辞—結合子音と結合母音

(1) 子音尾助辞と母音尾助辞

(2) 子音語幹助辞と母音語幹助辞

(七) 子音語幹の変形

二 内容と外容の対応の仕組

I 文論的かたち—語尾助辞によるかたちの形成

(I) 終止形

(一) 伝達法

(1) いいきり形（叙述形）

(2) 推量形

(3) 伝聞形

(二) 呼掛け法

(1) 命令形

(2) 意志形

(3) 勧誘形

(II) 連体形

(III) 連用形

(一) 接統形

(二) 同時形

(三) 例示形

(四) 条件形

(1) 順接通常順序形（非以前形・以前形）

(2) 順接通常無順序形

(3) 順接仮定形（非以前形・以前形）

(4) 逆接形（通常形・仮定形）

(5) 逆接強意形

(IV) 不定形

II 語論的かたち—語幹助辞によるかたちの形成

(I) 態

(II) 担い手待遇

(III) 聞き手待遇

(IV) 筋立て

III 二・三の問題点

(I) 来ル・スル

(二) 来ル

(三) スル

城 田 俊

三

- (Ⅲ) ヨウダ・ソウダ・ラシイ
- (Ⅳ) 補助動詞・接合動詞
- (Ⅴ) 一次的文法形態と二次的文法形態音のてだて
- (Ⅰ) 語幹
 - (一) 子音語幹
 - (二) 「音便」
 - (三) 母音語幹
- (Ⅱ) 子音語幹の優越性
- (Ⅲ) 語幹助辞
- (Ⅳ) 結合要素
 - (一) 結合母音
 - (1) a
 - (2) u
 - (3) i
 - (二) 結合子音
 - (1) s
 - (2) j
 - (3) r
- (Ⅴ) 先行品詞表示機能
- (Ⅵ) 尾助辞
 - (一) 母音の分布
 - (二) 命令形
 - (三) oR・aR
 - (四) 単音節尾助辞と多音節尾助辞
 - (五) 尾助辞の子音
 - (六) 否定助辞
 - (七) 母音助辞と子音助辞
 - (八) 最短の尾助辞と最長の尾助辞
- (Ⅶ) 接尾助辞

注
文献

本稿は語幹一つが与えられたなら、それに助辞（文法形態素）を付加するだけで、基本的な語形が導き出せるよう記述するのを主たる目的の一つとする現代国語動詞の共時的分析の試み^{第1}です。

一 外容の組立て方の主な仕組

(一) 語彙語幹と助辞 動詞の全ての語形は語彙語幹と助辞によって成立ちます。語彙語幹は事柄を流れとしてとらえる動詞という品詞の類別的意味と共にその語義を担う部分をいいます。tare-ru タベル。(二) 語尾助辞と語幹助辞 動詞の全ての語形は語幹と語尾に分かたれます。語幹と語尾の境目は、で示します(前掲例参)。助辞には語幹部に位置するものと語尾部に位置するものとがあります。前者は語幹を文法的に修飾・拡大する助辞で語幹助辞と呼ばれます。tare + tare-ru タベラレル。後者は語尾を構成するもので語尾助辞と呼ばれます。

(三) 語幹助辞 語幹助辞には形容詞形成助辞 (ta(i), na(i)) と動詞形成助辞 (ase(-ru), are(-ru), e(-ru); tagar(-u), mas(-u)) があります。語幹は語彙語幹のみで成立つ場合もあれば、語幹助辞によって拡大されている場合もあります。その拡大も一つの語幹助辞によってなされる場合もあれば、二つ(以上)によって行なわれる場合もあり

ます：tabe + sase + rare + mas-ita タベサセラレマシタ。語彙語幹と語幹助辞の境目及び語幹助辞間の境目は十で示します。

(四) 語尾助辞 — 尾助辞と接尾助辞

語尾助辞はその存在位置により、尾助辞と接尾助辞とが区別されます。尾助辞は語幹直後に位置し、接尾助辞は尾助辞の後に位置します。

尾助辞 (u, una, e, eba, oR; ta, tari, te, maj, nu(N), dzu, neba, ϕ)^{注2}は直接語幹に接合して文法上のかたちを形成します。尾助辞によってつくられるかたちを「一次的文法形態」と呼びます。

接尾助辞 (daroR(des'oR), sora(da(sor)desu), nara, to/ra, mo/to^{注3})は尾助辞を介して語幹に接合し、文法上のかたちを形成します。このようにして造られるかたちを「二次的文法形態」と呼びます。

尾助辞と接尾助辞の境目は・で示します：tabe-ta·daroR タベタダロウ。接尾助辞が語幹に接合する時に介される尾助辞は限られており、 ϕ とta, oRとtoのみで、その他は接尾助辞の後接を受け付けず、一次的文法形態のみをつくります。

(五) 語幹 — 子音語幹と母音語幹

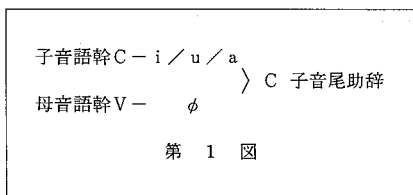
動詞語幹は子音で終るもの (例 tak-u 書く) と母音で終るもの (例 tabe-nu タベル, mi-nu 見ル) とがあります。前者を子音語幹、後者を母音語幹と呼びます。子音語幹の末尾子音として s・b・m・n・g・k・t・r・w^{注4}があり、母音語幹の末尾母音としては前母音 e と i があります。来ルとスルについては二・III・(I)でまとめて述べます。子音語幹を持つ動詞を子音語幹動詞、母音語幹を持つ動詞を母音語幹動詞と呼びます。

(六) 母音助辞と子音助辞 — 結合子音と結合母音

語幹に母音語幹と

子音語幹とがあるのに対応して、助辞にも母音（音節中心音）で始まる母音助辞と母音以外のもので始まる非母音助辞とがあります。母音以外のものには子音（音節開始音）と N（音節終結音）及び ϕ が含まれます。非母音助辞を子音助辞と呼んでおきます。まず、尾助辞、ついで、語幹助辞に關し母音助辞、子音助辞の区別を論じます（接尾助辞は全て子音助辞です）。

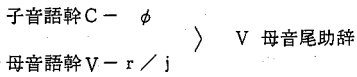
(1) 子音尾助辞と母音尾助辞 子音尾助辞には次のものがあります：ta, tari, te, nagara, maj, nu(N), neba, dzu, ϕ 。母音語幹に子音尾助辞が接合する場合、両者は何物をも介さず直接結合されますが、子音語幹に接合する場合、両者は母音 i/u/a を介して結合されます（第1図）。このような母音を結合母音と呼びます。語幹と助辞を結合させる要素を結合要素と呼ぶなら、子音尾助辞は結合要素として $i/u/a$ を持つということとなります（結合要素を表記する場合、 $i/u/a$ を引き、子音語幹に連なる要素を上、母音語幹に連なる要素を下に記すことに定めます）。 $i/u/a$ のうち a を選択するのは nu(N), neba dzu, u を選択するのは maj だけで、他は全て i を選択します。よって子音助辞の結合母音は子音助辞そのものの音声構成（ここではローマ字表記）により自動的に定められることとなります：(1/2)ta, (1/2)tari, (1/2)te, (1/2)nagara, (1/2) ϕ ; (2/2)maj; (2/2)nu(N),



$(\frac{2}{\phi})$ neba, $(\frac{2}{\phi})$ du^{註10}。 例 kas- $(\frac{1}{\phi})$ ta→kas-ita 貸^ハタ' kas- $(\frac{2}{\phi})$ ma]→kas-uma] 貸^スマ' kas- $(\frac{2}{\phi})$ neba→kas-aneba 借^サネ^ハ。 tabe- $(\frac{1}{\phi})$ ta→tabe-ta タ'タ' tabe- $(\frac{1}{\phi})$ ma]→tabe-ma] タ'マ' tabe- $(\frac{2}{\phi})$ neba→tabe-neba タ'ベネ^{註10}。 子音尾助辞には ϕ も含まれます。それは子音尾助辞ですからやはり結合要素として $(\frac{1}{\phi})$ を持ちます
kas- $(\frac{1}{\phi})\phi$ →kas-i 貸^ハ。 tabe- $(\frac{1}{\phi})\phi$ →tabe タ'タ'。

註記 *negara* は「~~土~~」によってつくられるかたち(不定形)に付加される接尾助辞と考えることもできます。どちらがより良い決定であるか保留しておきたいと思いますが、ここでは一応尾助辞にかぞえておきます。

母音尾助辞には次のものがあります：u, una, eba, o, or. 子音語幹に母音尾助辞が接合する場合、両者は何物をも介さず直接結合されますが、母音語幹に接合する場合、両者は鳴子音 r / j を介して結合されます（第2回）。このような子音を結合子音と呼びます。第2回



第 2 図

で示されるよう、母音尾助辞は結合要素 $(\frac{\phi}{r})$ を持ちます。 $(\frac{\phi}{r})$ のうち r を選択するのは oR だけで、他は全て r を選択します。よって、母音尾助辞の結合子音は全て母音尾助辞の音声構成によって自動的に定められることになり、 $\#t: (\frac{\phi}{r})u, (\frac{\phi}{r})ma, (\frac{\phi}{r})eba, (\frac{\phi}{r})e: (\frac{\phi}{r})oR$ 。例 $kas-(\frac{\phi}{r})u \rightarrow kas-u$ 貸す、 $kas-(\frac{\phi}{r})eba \rightarrow kas-eba$ 貸す、 $kas-(\frac{\phi}{r})e \rightarrow kas-e$ 貸す、 $kas-(\frac{\phi}{r})oR \rightarrow kas-oR$ 貸す。 $tabe-(\frac{\phi}{r})eba \rightarrow tabe-reba$ うたべる、 $tabe-(\frac{\phi}{r})e \rightarrow tabe-e$ うたべ、 $tabe-(\frac{\phi}{r})oR \rightarrow tabe-oR$ うたべる。

$$\begin{array}{ccccccc} \text{タ} & \sim & \wedge & \sim & \text{tabe}(\frac{\phi}{\Gamma}) \xrightarrow{\text{e}} & \text{tabe-ro} & \text{タ} \\ & & & & & & \sim & \text{タ} \\ & & & & & & & \text{ロ} \\ & & & & & & & \text{tabe}(\frac{\phi}{\text{J}}) \text{or} \rightarrow \text{tabe-jor} \\ & & & & & & & \text{タ} \\ & & & & & & & \text{ベ} \\ & & & & & & & \text{エ} \\ & & & & & & & \text{ウ} \end{array}$$

註記 尾助辞 *eo* は結合子音として、普通、*r* をとりますが、*j* とゆれる傾向があります。このゆれは機能なしとせず、*j* をとると文語的で古めかしくなります。: *tabe:ro* タベロー *tabe:jo* タベヨ。

(2) 子音語幹助辞と母音語幹助辞　子音語幹助辞には次のものがあります：*tagar, mas, ta, na*。母音語幹に子音語幹助辞が接合する場合、両者は何物をも介さず直接結合されますが、子音語幹に接合する場合、両者は母音 *i* / *a* を介して結合されます。かくして、その結合要素は $(\frac{1}{\phi}a)$ と表記されるものとなります。このうち、*a* を選択するのは *na* だけで、他の全ては *i* を選択します。よって、子音語幹助辞の結合母音は子音語幹助辞の音声構成で自動的に定められることになり、 $*(\frac{1}{\phi})tagar, (\frac{1}{\phi})mas, (\frac{1}{\phi})ta; (\frac{2}{\phi})na$ 。例 $kak + (\frac{1}{\phi})mas \rightarrow kak + imas$ 　書 $\chi \chi' kak + (\frac{2}{\phi})na \rightarrow kak + ana$ 　書 $\chi \chi' ta + (\frac{1}{\phi})mas \rightarrow ta + mas$ 　 $\chi \chi' ta + (\frac{2}{\phi})na \rightarrow ta + na$ 　 $\chi \chi'$ 。

母音語幹助辞には次のものがあります: *ase, ne, e*。子音語幹に母音語幹助辞が接合する場合、両者は何物をも介さず直接結合されますが、母音語幹に接合する場合、子音を介して結合されます。 *ase* の辞の結合要素は $(\frac{s/r/[ra]}{\phi}r)$ と表記されるものとなり、結合子

音は全て母音助辞の音声構成によって自動的に定められることになります： $(\frac{\phi}{s})ase, (\frac{\phi}{r})are, (\frac{\phi}{[ra]r})e$ 。例 $kak + (\frac{\phi}{s})ase \rightarrow kak + ase$ 書カセ $(\frac{\phi}{s})$ $kak + (\frac{\phi}{[ra]r})e \rightarrow kak + e$ 書ケ $(\frac{\phi}{s})$ 。 $tabe + (\frac{\phi}{s})ase \rightarrow tabe + ase$ タベ $(\frac{\phi}{s})$ サセ $(\frac{\phi}{s})$ $tabe + (\frac{\phi}{[ra]r})e \rightarrow tabe + [ra]re$ タベ $(\frac{\phi}{s})$ [ラ]ン $(\frac{\phi}{s})$ (134頁参)。

(七) 子音語幹の変形 t に始まる(必ず結合要素 $i(\phi)$ を持つ)子音尾助辞が子音語幹に接合すると、語幹末子音の性質に従って、次のような変形が行なわれます。

(1) 語幹末子音が $g/b/n/m$ でなければ t をそのまま残します。
 $e, g/b/n/m$ でなければ t をそのまま残します。

(2) 語幹末子音が s であれば結合母音 i との結合でつくられる音節に何らの変更を加えず、 s でなければその音節に以下のような変形を行ないます。(i) $b/m/n$ の場合、その音節を N にかえます。(ii)

k/g の場合、その音節を J にかえます(ただし、 je 行クの場合、

例外的にその音節を T にかえます)。(iii) それ以外の子音の場合、その音節を T にかえます。 t に始まる子音尾助辞を ja で代表させ例を

あげます： $kas - (\frac{\phi}{s})ta \rightarrow kas - ita$ 貸シタ $job - (\frac{\phi}{s})ta \rightarrow job - ida$ $joN - (\frac{\phi}{s})da$ 呼ンタ $jom - (\frac{\phi}{s})ta \rightarrow jom - ida$ $joN - (\frac{\phi}{s})da$ 読ンタ $sin - (\frac{\phi}{s})ta \rightarrow sin - ida$

$sin - (\frac{\phi}{s})da$ 死ンタ $kak - (\frac{\phi}{s})ta \rightarrow kak - ita$ $kaJ - (\frac{\phi}{s})ta$ 書イタ $kag - (\frac{\phi}{s})ta \rightarrow kag - ida$ $kaJ - (\frac{\phi}{s})da$ 嗅イタ $ik - (\frac{\phi}{s})ta \rightarrow ik - ita$ $iT - (\frac{\phi}{s})ta$ 行ンタ

$mot - (\frac{\phi}{s})ta \rightarrow mot - ita$ $moT - (\frac{\phi}{s})ta$ 持ンタ $kir - (\frac{\phi}{s})ta \rightarrow kir - ita$ $kiT - (\frac{\phi}{s})ta$

切ンタ $i\phi - w - (\frac{\phi}{s})ta \rightarrow i\phi - w - ita$ $iT - (\frac{\phi}{s})ta$ ムッタ (三(1)参)。以上の変

形は尾助辞を語幹に融接させ、語幹と語尾の境界を摩擦音 s を持つ

語幹以外で消し去り、外容的にも一体化した語をつくりだします。境界が消失している場合、 $T \cdot N \cdot J$ を便宜的に語幹内に入れ、その後(かっこでくくった)境目のしるし() を書き入れます(前掲例参)。

二 内容と外容の対応の仕組

動詞のかたちには文論的かたちと語論的かたちが区別されます。

文論的かたち(構文論的形態)とは動詞が文中でその構文上の要請に応えてとるかたちであり、連なるものにより、終止形・連体形・連用形・不定形に分かたれます。文論的かたちは外容から見れば全て語尾によってつくられています。それらは語尾助辞によってつくられる動詞の語形です。語論的かたちとは文中で用いられるということから離れ、一つの品詞としての動詞が本来持つかたちをいいます。態・担い手待遇・聞き手待遇・筋立て(否定・肯定)は語論的かたちです。これらは外容から見ると全て語幹の拡大によってつくられています。語論的かたちは語幹助辞によってつくられる動詞のかたちです。

I 文論的かたち——語尾助辞によるかたちの形成

終止形は文末ポーズに、連体形は体言に、連用形は用言に連なることを基本的機能とします。それに対し、不定形(例 書き)は

連なるかたちを特定しません(第1表参)

(1)終止形 連用形は事柄(城田b—1頁)一項目にしかかわれないのに対し、終止形は事柄のみならず、話にも事柄の担い手にもかわり得ます。その文法上の表現が伝達法と呼掛け法の存在です。前者は事柄を話に関係づけて示し、後者は事柄とその担い手を話の担い手に関係づけて示します。

(一)伝達法 伝達法はいいきり法(叙述法)・推量法・伝聞法の対立によって構成されます。推量法とは事柄が話し手の推量の中にあること、伝聞法は事柄が他の話し手によってすでに語られたものであることを示し、いいきり法(叙述法)は事柄を話し手の立場に特に関連づけずに示します。この三者は内部に時制の対立を持ちます。いいきり法はいいきり形(叙述形)、推量法は推量形、伝聞法は伝聞形によって示されます。

(1)いいきり形(叙述形) 語幹に尾助辞 $u \cdot ta$ を付加することによってつくられます。前者は現在形、後者は過去形をつくります。kak($\frac{1}{2}u$)kak $\cdot u$ 書ク、kak($\frac{1}{2}ta$)kak $\cdot ita$ kak $\cdot ita$ 書イタ。tabe($\frac{1}{2}u$)u $\rightarrow$ tabe $\cdot ru$ タベル、tabe($\frac{1}{2}ta$)ta $\rightarrow$ tabe $\cdot ta$ タベタ(uに対応する否定尾助辞 $nu(N)$ に $\frac{1}{2}$ をつけて136頁参)。

(2)推量形 接尾助辞 $daror$ を尾助辞 $u \cdot ta$ を介して語幹に付加することによってつくられます。uを持つかたちは推量形現在、taを持つかたちは推量形過去となります。kak($\frac{1}{2}u$)u $\cdot daror$ kak $\cdot u$ · $daror$ 書クタロウ、kak($\frac{1}{2}ta$)ta $\cdot [da]roR$ kak $\cdot ita$ · $[da]roR$ カイタ

「ダ」ロウ。推量形過去において接尾助辞 $daror$ の頭の音節は脱落(めと交替)し得、表示のよう自由出沒要素となります。その出沒は少くとも文体を区別し、 da がないかたちは口語的・俗語的です。接尾助辞 $daror$ によってつくられる推量形現在(例 $deki \cdot ru \cdot daror$ デキルダロウ)に対し、尾助辞 or によってつくられるかたち($deki \cdot or$ デキョウ)が文体上の競合形として存在します。ただし、このかたちの使用は現在著しく狭められています(城田a—41頁参)。(否定推量形に関しては第2表※3参)

(3)伝聞形 接尾助辞 $soRda$ を尾助辞 $u \cdot ta$ を介して語幹に付加することによってつくられます。uを持つかたちは伝聞形現在、taを持つかたちは伝聞形過去となります。kak($\frac{1}{2}u$)u $\cdot soRda$ kak $\cdot u$ · $soRda$ 書クソウダ、kak($\frac{1}{2}ta$)ta $\cdot soRda$ kak $\cdot ita$ · $soRda$ 書イタソウダ。

註記 伝達法の終止形は文末ポーズのみならず、シ・ガ・ケレドモ・カラ・(ノ)デ・(ノ)二等複文をつくる接続助詞にも連なることができます。

(二)呼掛け法 呼掛け法は話の担い手に呼掛け、事柄の担い手と一致を課する文法意味です。呼掛け法は動詞において二つの担い手の一致を課さない伝達法と対立し、法の一大体系を築きます。呼掛け法は命令法・意志法・勧誘法の対立によって構成されます。命令法は聞き手に、意志法は話し手に、勧誘法は語らい手に呼掛け、それぞれ事柄の担い手に一致するよう課します。命令法は命令形、意志法は意志形、勧誘法は勧誘形によって示されます。呼掛け法で

はその意味の整いに對し、かたちはやや不釣合に對應します。

(1) 命令形 命令形は肯定形と否定形に分かたれます。肯定形は語幹に尾助辞 e_o (126 画) を付加することによってつくられます。
 $kak(\frac{e}{i})_o \rightarrow kak-e$ 書ケ $tabe(\frac{e}{i})_o \rightarrow tabe-ro$ タベロ (母音語幹動詞の o による命令形については 126 頁参)。

註記 イラッシャル・下サル・オッシャル等の敬讓の動詞及び聞き手敬讓動詞 (35 頁) また来ル等わずかな動詞では、 $(\frac{e}{i})_o$ に対し $(\frac{i}{e})_o$ (子音助辞) という競合形が存在します。これは、もし子音語幹が r で終るなら r をゼロにかえ、(母音語幹なら何らの変形を加えず)、 j を付加するというものです。
 $kudasar(\frac{i}{r})_o \rightarrow kudasar-j$ クタサイ $iraTsar(\frac{i}{r})_o \rightarrow iraTsar-j$ イラツシャイ。敬讓の動詞では規則的かたち $(kudasar-e)$ は古めかしく、ないしは、方言的印象を伴うのに對し、こちらが正則的です。来ルにおいてはこの助辞の独占領域となります (133 頁参)。クレルでは規則的かたち $(kure-ro)$ は俗語的・方言的印象を醸し、普通の文体に属するかたちは「現代日本人の意識に即」(宮田—37 頁) して云えば、 kur という子音語幹からつくられます。 $kur(\frac{e}{i})_o \rightarrow kure-クレ$ 。ですからこの動詞は $kure$ と kur と o の二つの語幹を持つこととなります。いいきり形過去、使いようによってはいいきり形現在も命令を示し得ます。(サア) 書イタ。(サア) 書ク。

否定形は語幹に尾助辞 una を付加することによってつくられます。
 $kak(\frac{e}{i})_una \rightarrow kak-una$ 書クナ、 $tabe(\frac{e}{i})_una \rightarrow tabe-runa$ タベルナ。

(2) 意志形 意志形も肯定形と否定形に分かたれます。肯定形は語幹に尾助辞 oR を付加することによってつくられます。
 $kak(\frac{e}{i})_oR \rightarrow kak-oR$ 書コウ、 $tabe(\frac{e}{i})_oR \rightarrow tabe-jOR$ タベヨウ。尾助

辞 e_o によってつくられるかたちも話し手に呼掛けることができます。このかたちは oR によるかたちと對立し、話し手のなげやりな意志を示します。否定形は maJ を付加することによってつくられます。
 $kak(\frac{e}{i})_maJ \rightarrow kak-umaJ$ 書クマイ、 $tabe(\frac{e}{i})_maJ \rightarrow tabe-maJ$ タベマイ。

(3) 勧誘形 語幹に尾助辞 oR を付加することによってつくられます。勧誘形は否定形を持ちません。

以上のように、 e_o によるかたちは聞き手にも話し手にも呼掛けることができ、 oR によるかたちは語らい手にも話し手にも呼掛けることができ、二つのかたちの意味は呼掛ける相手によって分化し、話し手に呼掛ける場合のかたちの重複はなげやりな意志・なげやりでない意志の表出・非表出というやや文体的な對立を生み出しています。クツチャエ、クツチャエというようにない方については(梅原—245 頁) 参。

(II) 連体形 形容詞の終止形と同様、動詞の連体形は伝達法しか持ちません(これは動詞連体形と形容詞との類似の一表現です)。この連体形はいいきり法と推量法の對立によって構成され、伝聞法がなく、その点終止形とこととなります。連体形はいいきり形・推量形は終止形と全く同じ方法によってつくられます。 kor と書ク人、 $kak(\frac{e}{i})_ka$ 書イタ人。 $okor-u \cdot daroR$ オコルダロウ悲劇(奥津—56 頁)、 $okoT(\frac{e}{i})_ka \cdot daroR$ オコッタダロウ悲劇。いいきり形・推量形の終止形と連体形は一つのかたちの二つの用法なのか、二つのかたちの外

容の一致なのか議論のある所です。連体形におけるuとtaの対立は時制の対立に具体化されるとは保証されず、よく順序(城田b—9頁)の対立となってあらわれます。

(II) 連用形 連用形はそれ自身が示す事柄aが、それに連なる用言の示す事柄bに、なんらかの関連があるものとして提示します。かかわるのは事柄a一項目で、法的意味は担うことはできず、連なる用言の終止形のそれに一致するのが原則です。

連用形には接続形・同時形・例示形・条件形があります。条件形は事柄aが事柄bの実現になんらかの条件となることを示し、その他のかたちはそのような意味を特に持ちません。このうち例示形は事柄を例として示し、同時形・接続形はそのような意味を示しません。このうち同時形は事柄bと同時に起こる事柄aを示し、接続形はそのような意味を示しません。接続形は条件も例も同時性も示さず、連用形中最も消極的内容を持ちます。その用法の多様さ(多義)はこのネガティブにのみ規定できる内容によって説明されます。

(I) 接続形 語幹に尾助辞teを付加することによってつくられます： $kak(-\frac{1}{2})te \rightarrow kaJ(-)te$ 書イテ、 $tabe(-\frac{1}{2})te \rightarrow tabe-te$ タベテ。接続形は事柄aの存在を「確かめ」(山田a—395頁、b—118頁)、それを事柄bに対し完了したものとして示す(松下—530頁)といわれますが、かたち自身に確認とか完了の意味の表示があると迄考えられませんが、接続形の意味はよく①並立、②継起、③原因、④連用修飾(松村—477頁、鈴木—331頁)、⑤条件と分類されますが、これらの意味

は接続形が前述のような消極的内容を持つ連用形であることの上になつて、語彙の意味の脈絡の中で醸成されるものといえましょう。右手ヲアゲテ、左手ヲオロシナサイ①。太郎ハ木ニノボツテ、柿ヲトツタ②。新聞ヲ読ンデ、世論ノ動向ヲ知ル③。選手達ハ胸ヲ張ツテ行進シタ④。云ツテ悪イカ⑤。②の意味は格助詞カラによって強化・特定されます。この特定化される継起という意味は同時という強い意味を持つ同時形(後述)に、あまりはつきりしない意味を持つ接続形が対立し、そこで意味の特定化の要求がおこる時、それに応える表現としてあるものといえましょう。ラジオヲ聞キナガラ、新聞ヲ読ム。ラジオヲ聞イテ、新聞ヲ読ム。ラジオヲ聞イテカラ、新聞ヲ読ム。⑤の意味は助詞ハによって強化され得ます。云ツテハ悪イカ。またハを伴ったかたちは繰返し行なわれることを示す構文の中で用いられます。町へ出デハ、映画ヲ見タ。

(II) 同時形 語幹に尾助辞nagaraを付加することによってつくられます： $kak(-\frac{1}{2})nagara \rightarrow kak-inagara$ 書キナガラ、 $tabe(-\frac{1}{2})nagara \rightarrow tabe-nagara$ タベナガラ。これには文体上の競合形として $(-\frac{1}{2})tsutsu$ によってつくられるかたちがあります： $kak(-\frac{1}{2})tsutsu \rightarrow kak-itsutsu$ 書キシツ、 $tabe(-\frac{1}{2})tsutsu \rightarrow tabe-tsutsu$ タベシツ。同時形が示す事柄aと事柄bに対する同時性は文法意味順序にかかわります。(126頁註記参)

(III) 例示形 語幹に尾助辞tariを付加することによってつくられます： $kak(-\frac{1}{2})tari \rightarrow kaJ(-)tari$ 書イタリ、 $tabe(-\frac{1}{2})tari \rightarrow tabe-tari$ タベタリ。

例示形は事柄を例として示します。普通、スルを伴い、複数の動詞を並べたてて用いられます。ハイツタリデタリスル。歌ツタリ踊ツタリシタ。このかたちからよく慣用句的なものが生れます。願ツタリカナツタリ。

(四)条件形 条件形には逆接形と順接形とがあります。逆接形は事柄bの実現にさしきわらない事柄aを示すことによってbの実現を強調します。順接形は、普通、事柄bの実現の条件となる事柄aを示します。順接形・外デ遊ブト、丈夫ニナル①。外デ遊ングラ、気分ガスキリシタ②。外デ遊ベバ、丈夫ニナル③。外デ遊ブナラ、帽子ヲカブレ④。外デ遊ンダナラ、手ヲ洗エ⑤。逆接形・外デ遊ンデモ、カゼヲヒカナイ⑥。外デ裸デ遊ボウト「モ」、カゼヲヒカナイ体ダ⑦。

順接形には事柄bに対し事柄aを仮設して(仮定条件として)示すものとそのようなはっきりした意味を持たず、仮定条件としてもまた既定条件としても示すことができるものとがあります。前者を仮定形(④⑤)、後者を通常形(①②③)と呼びます。通常形は順序の対立を持つ順序形(以前形・非以前形)と順序の対立を持たない無順序形とがあります。以前形(②)は事柄aが事柄bの以前に存在することを表示し、非以前形(①)はそのような意味を特に表示しません。無順序形(③)も事柄aがbの以前に存在することを示すという強い意味を持たず、この点、非以前形に近いといえますが、非以前形が話し手の意志に左右されるような事柄を示す用言につらなることができないのに対し、無順序形はそのような制限を持ちま

せん。^{注9}

逆接形もまた仮定形と通常形に分かれます。仮定形(⑦)は事柄aを仮設して示し、通常形(⑥)は仮設というはっきりした意味を持ちません。ですから⑥のように事柄aが仮定的であることもあり、また、兄ハ酒ハ飲ンデモ、タバコハスワナイのように事柄が既定の事実であることもまたあります^{注10}(第2表参)。

以上のうち順接通常無順序形(③)のみが尾助辞だけでつくられる一次的文法形態として存在し、他は接尾助辞によってかたちとして整えられる二次的文法形態としてあります。

(1)順接通常順序形(非以前形・以前形) 語幹に接尾助辞to_uを尾助辞u・taを介して付加することによってつくられます。ただし、母音尾助辞uにつく接尾助辞はtoであり、子音尾助辞taにつく接尾辞はraであり、無声子音と鳴子音による最大級の音声的対立を形成します。uを(従ってtoを)持つかたちは非以前形、ta(従ってraを)持つかたちは以前形となります。kak(⁹u・to→kak-u・to書クト、kak(⁹ta-ra→ka[⁹ta-ra書イタラ。

(2)順接通常無順序形 語幹に尾助辞ebaを付加することによってつくられます。kak(⁹eba→kak-eba書ケバ、tabe(⁹eba→tabe-ebaタベレバ(ebaに対応する否定尾助辞neba_uに_uは136頁参)。

(3)順接仮定形(非以前形・以前形) 語幹に接尾助辞na_uを尾助辞u・taを介して付加することによってつくられます。uを持つかたちは非以前形、taを持つかたちは以前形となります。kak(⁹u・

nara→kak-u·nara 書くナラ、kak-($\frac{1}{j}$)ta·nara→ka($\frac{1}{j}$)a·nara→書いてナラ。

(4) 逆接形 (通常形・仮定形) 逆接形のうち仮定形は語幹に接尾助辞 to [mo] を尾助辞 oR を介して付加することによってつくられます: kak-($\frac{1}{j}$)oR·to [mo] →kak·oR·to [mo] 書くウトモ [モ]、tabe-($\frac{1}{j}$)oR·to [mo] →tabe·joR·to [mo] タベヨウトモ [モ]。通常形は語幹に接尾助辞 mo を尾助辞 te を介して付加することによってつくられます: kak-($\frac{1}{j}$)te·mo→ka($\frac{1}{j}$)te·mo 書くイテモ、tabe-($\frac{1}{j}$)te·mo→tabe·te·mo タベテモ。これらのかたちに於て、仮定(推想)の意は尾助辞 oR が示し、それに対立する te は必然的に非推想の意を担わされます。また、逆接条件の意は接尾助辞 to [mo]/mo が示し、尾助辞が母音助辞である場合 to [mo]、子音助辞である場合 mo が選択され、やはりここでも、無声嗓子音と鳴子音の最大級の音声的対立によって意味が担われているよう観察されます。

(5) 逆接強意形 逆接形は語尾の t の前に taT を挿入することにより強意することができます。かく強意されると接尾助辞 mo は自由出沒要素となります: tabe·te·mo (語尾の t の前に taT を挿入) →tabe·taT·te·[mo] タベタツテ [モ]。ただし、仮定形では taT が挿入されると t の後の母音 o は e にかえられます: tabe·joR·to [mo] (語尾の t の前に taT を挿入) →tabe·joR·taT·te [mo] タベヨウタツテ [モ]。逆接強意形は普通の逆接形の文体上の競合形として働き、「やや俗語的であって、文章のなかではあまりもちいられません(鈴木—361頁)」。

註記 このような挿入される助辞を挿入助辞と呼びます。かくして、語尾助辞には尾助辞・接尾助辞・挿入助辞の三種類があることになります。

(Ⅳ) 不定形 語幹に ϕ 尾助辞を付加することによってつくられます。 ϕ 尾助辞は子音助辞であり、結合要素は ($\frac{1}{j}$) です: kak-($\frac{1}{j}$) ϕ →kaki 書き、tabe-($\frac{1}{j}$) ϕ →tabe タベ (註11) ($\frac{1}{j}$) ϕ に対応する否定尾助辞 ($\frac{1}{j}$) ϕ anu については136頁参)。以上のような外容からもうかがえるように、不定形は語幹の意味を最も純粹に保つとはいえ、語幹の語形化(音声化)ともいえるもので、語幹が支える文法的情報を担うだけで、積極的な文法上の情報をそれ自身では有しません。固有の積極的文法意味を持たないのが、不定形の固有の文法意味といえます。まず、不定形は事柄一項目にしかかわれず、連用形と共に法という文法意味を持ちません。しかし、連用形が事柄 a と b の何らかの關係を示すのに対し、不定形はそれ自身で特にそのような内容を示しません。このような消極の意味に対応しているのが結合上の特性で、終止形・連体形・連用形がそれぞれつらなるかたちを積極的に指定するのに対し、不定形は連なるかたちを特に指定しません(第1表)。

不定形は主に俳句・川柳という特殊なジャンルに於てですが、文末ポーズに連なることができます…春雨やコタツノ外へ足ヲ出シ。このようないわゆる「連用止」という句法が可能なのは、不定形が文論的かたちの中で全く消極的内容の存在であり、特定された構文上の意味あいを持たず、よってポーズにもまた連なり得るためです。

	終 止 形	連 体 形	連 用 形	不 定 形
連なるもの	文 末 ポ ー ズ	体 言	用 言	積 極 的 に 指 定 し な い
文 法 意 味	事柄と話とにかかわる（伝達法を持つ）		事柄一項目にかかわる（法を持たない）	
	事柄とその担い手と話の担い手にかかわり得る（呼掛け法を持つ）	かかわらない（呼掛け法を持たない）		
			事柄aとbとの関係を示す（接続形・例示形・条件形を持つ）	事柄aとbとの関係を特に示さない

第1表 文論的かたち

この句法が「読み手の想像にまかせる」（『日本国語大辞典』）所が大なるのも一つに不定形が最小の文法的情報を担い、聞き手（読み手）の視野をあまり限定しないかたちであることからきているといえましょう。もし、

不定形はハ・モ・サエ等のとりたての助詞を介して抽象的語義を持つからこそ可能になることですから新聞ヲ読ミ、世論ノ動向ヲ知ル。
 不定形はハ・モ・サエ等のとりたての助詞を介して抽象的語義を

有する動詞スルに結びつきます・書キハ（モ／サエ）スル。また、格助詞ニを伴って場所的移動の動詞と結びつき、移動の目的を示します・御飯ヲタベニ帰ル。このような体言に近いような用法が可能なのも、また、たやすく名詞化したり（釣ル↓釣り）、造語要素に転化したり（釣り落ス）するのも、不定形が担う文論上の情報が最小であることからおこると考えられます。^{注13}

II 語論的かたち——語幹助辞によるかたちの形成

文法意味 態・担い手待遇・聞き手待遇・筋立ては語幹助辞により語幹が修飾・拡大されることによって示されます。これらはいかなる文論的かたちにおいても原則的に保存される、動詞が本来保有する文法意味であり、それを示すかたちは、前述のよう、語論的かたちと呼ばれます。

(I) 態 態とは事柄とその担い手との関係を示す詞的文法意味です。これは動詞特有の文法意味で他の品詞には存在しません。用言中動詞とは何かと問われれば、あらゆる語形で態の意を保つものと答えることができます。態は使役態・受身態・可能態・通常態の対立によってまず構成されます。これら態の意味は（城田b-7頁）参。使役態は語幹に^せ、受身態は^{られ}、可能態は^べを付加することにより、通常態はこれら助辞を付加しないことにより、示されます。新たにつくられた態のかたちは一個の母音語幹動詞として動

詞語尾をとって再展します。使役態・受身態・可能態・通常態を示す動詞を今仮に使役態動詞、受身態動詞、可能態動詞、通常態動詞と呼びます。使役態動詞 $kak + (\frac{1}{2})ase \rightarrow kak + ase$ 書カセ⁽¹⁾、 $tabe + (\frac{1}{2})ase \rightarrow tabe + sase$ タベサセ⁽²⁾。受身態動詞 $kak + (\frac{1}{2})are \rightarrow kak + are$ 書カレ⁽³⁾、 $tabe + (\frac{1}{2})are \rightarrow tabe + rare$ タベラレ⁽⁴⁾。可能態動詞 $kak + (\frac{1}{2})ra \rightarrow kak + e$ 書ケ⁽⁵⁾、 $tabe + (\frac{1}{2})ra \rightarrow tabe + [ra]$ re タベ⁽⁶⁾「⁽⁷⁾」⁽⁸⁾。このうち可能態動詞をつくる $(\frac{1}{2})ra$ の結合要素の $[ra]$ は表示のように自由出沒要素で、 ra を省略するかたち(タベレ⁽⁹⁾)は少くとも口語的であり、保存するかたち(タベラレ⁽¹⁰⁾)は正則的です。しかし、後者は受身態動詞と区別できない難点を持ちます。タベレ⁽⁹⁾のタイプが広まり出しているのは、この語幹助辞が結合要素を他の助辞の結合要素と同じく $(\frac{1}{2})$ と単純化し、統一しようとしていることを示すものですが、これには前述の難点の解消という構造的要因が一部働いているよう思われます。

語幹助辞 $tagar$ をもつ動詞は事柄が担い手の希望の中にあることを示し、事柄とその担い手という二項目にかかり、態の意味を担うといえます。これは動詞として再展し、使役態・受身態・可能態の動詞と対立する資格を有します。ここに願望態というもう一つの態をまとめてよさそうです(城田 b—8頁)： $kak + (\frac{1}{2})tagar \rightarrow kak + itagar$ 書キタガ⁽¹¹⁾、 $tabe + (\frac{1}{2})tagar \rightarrow tabe + itagar$ タベタガ⁽¹²⁾。これを願望態動詞と呼んでおきます。願望態動詞は形容詞の語尾をとって再展する願望態形容詞と対応して存在します。願望態形容詞は語幹に ta を付加することによってつくられ、派生順序としては願

望態動詞の前にあります： $kak + (\frac{1}{2})ta \rightarrow kak + ita$ 書キタ⁽¹³⁾、 $tabe + (\frac{1}{2})ta \rightarrow tabe + ita$ タベタ⁽¹⁴⁾。

(II) 担い手待遇 担い手待遇とは事柄の担い手の特徴づける詞的意味で、敬讓待遇と通常待遇の対立によって構成されます(城田 b—10頁)。敬讓待遇は語幹に are を付加することにより、通常待遇はこの助辞を付加しないことによって示されます。新たにつくられた敬讓待遇のかたちは一個の母音語幹動詞として再展します。敬讓待遇を示す動詞を今仮に担い手敬讓動詞と呼びます： $kak + (\frac{1}{2})are \rightarrow kak + are$ 書カレ⁽¹⁵⁾、 $tabe + (\frac{1}{2})are \rightarrow tabe + rare$ タベラレ⁽¹⁶⁾。担い手敬讓動詞は多数の成員を擁するがっちりとした体系の中に組み込まれている受身態動詞に外形が一致し、それゆえ動詞のかたちの中でやや浮上った存在です。

(III) 聞き手待遇 聞き手待遇とは聞き手に対する話し手の態度を示す辞的文法意味で、担い手待遇と同じく敬讓待遇と通常待遇の対立によって構成されます(城田 b—13頁)。敬讓待遇は語幹に mas を付加することにより、通常待遇はこの助辞を付加しないことにより示されます： $kak + (\frac{1}{2})mas \rightarrow kak + imas$ 書キマス⁽¹⁷⁾。 mas には $(\frac{1}{2})masur$ という古めかしい印象を伴う文体上の競合形が存在しますが、その使用には制限があります。書キマスル・書キマス、書キマスレバ・書キマセバ。^{注14} mas は語幹部の終末にあるのを原則とし、また： $kak + ase + rare + mas$ 書カセラレマス⁽¹⁸⁾。この敬讓待遇を示す動

詞を聞き手敬讓動詞と呼びます。聞き手敬讓動詞の再展に当っては次の語形に関しコメントが必要です。

(1) いいきり形現在の否定形 mas は前述のよう、語幹部の終末に位置するのを原則とし、それに否定を示す語幹助辞 na を後接させることはできません。また、na は形容詞の語尾をとりますが、形容詞の話し手敬讓形は des(u) の付加によります。しかし、それは特に現在形においてあまり熟したものとはいえません。以上のような理由が重なって、聞き手敬讓動詞のいいきり形現在は語尾助辞^(p)hu(N) によって形成されます。ただし、その結合母音 a は e にかえられます： $kak + imas \xrightarrow{(e)} N \rightarrow kak + imas \xrightarrow{e} N$ 書キマセン、 $tabe + mas \xrightarrow{(e)} N \rightarrow tabe + mas \xrightarrow{e} N$ タベマセン。このかたちは連辞の聞き手敬讓のかたちに後接され得ます：書キマセンデシタ。

(2) 推量形・伝聞形 mas によって拡大された語幹に敬讓の接尾助辞 des^{oR}・soRdesu を尾助辞 u・ta を介して付加することによってつくられます： $kak + imas \xrightarrow{u} des^{oR}$ 書キマセシヨウ、 $kak + imas \xrightarrow{u} soRdesu$ 書キマセソウデス、 $kak + imas \xrightarrow{ita} des^{oR}$ 書キマシタデシヨウ、 $kak + imas \xrightarrow{ita} soRdesu$ 書キマシタソウデス。des^{oR}・soRdesu を u・ta を介し、mas によって拡大されない語幹に付加することによっても敬讓の意を示す推量形・伝聞形がつけられます。普通使われるのはこの方で、前者のかたちはより丁寧いいかたです。

(3) 命令形 規則的には mas-e (例 $kak + imas \xrightarrow{e}$ 書キマセ) となりますが、このかたちは前掲の敬讓の動詞 (128 頁) を例外として普通あ

まり用いられません。それにかわる敬讓の命令の表現に関しては長くなりますのでここでは省略します。

(4) 意志形・勧誘形 規則的かたちが用いられますが、oR の付加にあたって、語幹助辞末の子音を口蓋化する^{注15}（を与える）必要があります： $kak + imas \xrightarrow{(p)} \text{を与える} \rightarrow kak + imas^{oR}$ 書キマシヨウ。

(5) その他 文体として低い層にある逆接強調形は聞き手敬讓動詞になじむものではありません。接続形 ($kak + imas \xrightarrow{ite}$) の用法は通常待遇動詞のそれに「比べて極めて限られています」(宮田—50 頁)。^(1-p)による不定形の存在は疑問です。

(VI) 筋立て 筋立てとは事柄の論理的性質を規定する詞的文法意味です。筋立ては否定筋立て・肯定筋立ての対立によって構成されます。否定筋立ては事柄が肯定としては筋立たないことを示し、肯定筋立てはそのような強い意味を持ちません。否定筋立ては基本的に語幹に na を付加することにより、肯定筋立てはこの助辞を付加しないことにより示されます。あらたにつくられた否定筋立てのかたちは一個の形容詞として再展します。この否定筋立てを示す形容詞を否定形容詞と呼びます： $kak + (p)na \rightarrow kak + aa$ 書カナ⁽ⁱ⁾、 $tabe + (p)na \rightarrow tabe + na$ タベナ⁽ⁱ⁾。

用言の体系において否定筋立ては語幹助辞 na によって示されるのを基本とします。しかし、それが形容詞形成語幹助辞であることにより、形態論的には致命的ともいえる欠陥を内包し、動詞の体系に

ある種の構造的動態を惹起します。形容詞であるということは呼掛け法のかたちを持たないことです。かくして呼掛け法は尾助辞によって独自に否定のかたちをつくることになります(例 kak-una, kak-uma)が、それは語幹助辞による否定形容詞で覆える部分にも尾助辞による否定のかたちを許容・保存する結果を生み、否定の表現は分裂し、競合する部分を持つことになります。(1)否定形容詞の不定形は na-ku (例 kak+ana-ku 書カナク)というかたちを持ちますが、それには語幹に尾助辞 nu を付加してつくるかたち (kak+adu 書カズ) が競合します。(2)否定形容詞の順接通常無順序形は na-kereba(kak+ana-kereba 書カナケレバ)というかたちを持ちますが、それには語幹に尾助辞 neba を付加してつくるかたち (kak+aneba 書カネバ) が競合します。(3)否定形容詞の叙述形現在 is na-i(kak+ana-i)ですが、文体的色あいが濃過ぎて使用は極度におさえられているとはいえ、語幹に尾助辞 nu (N) を付加してつくるかたち (kak+anu(N) 書カヌ) がそれに競合します。僕ハ書カナイヨ・俺ハ書カヌ(N)ゾ。nu (N) が na- をおさえて使用されるのは聞き手敬讓動詞に於てであることはその構造上の要因と共に既に述べました。(4)否定形容詞の接続形では -kute(kak+ana-kute 書カナクテ)と -jde(kak+ana-jde) の二つの尾助辞が競合、補充し合いますが、(1)で述べた -du による不定形が助辞 u をともなったりして (kak+adu, kak+adu u) その競合・補充に参加します(この三つのかたちの競合・補充の様子の記述は紙数の関係で省略します)。

ここでふれた全ての助辞を表示し、まとめとします(第2表)。

					尾 助 辞		接尾助辞						尾 助 辞		接尾助辞	語 幹				助 辞	
					結合要素			辞								結合要素		品詞			
終 止 形	伝 達 法	叙 述 法	肯定	(ϕ r)	u	連 用 形	接 続 形	($\frac{1}{\phi}$)	te	否 定 態	願望態	形容詞成助辞	($\frac{a}{\phi}$)	na(-i)							
			否定	($\frac{a}{\phi}$)	nu ^{※1}			($\frac{1}{\phi}$)	nagara ^{※4}				($\frac{1}{\phi}$)	ta(-i)							
			過去	($\frac{1}{\phi}$)	ta			($\frac{1}{\phi}$)	tari				($\frac{1}{\phi}$)	tagar(-u)							
			推量	($\frac{a}{\phi}$)	u ^{※2}			($\frac{1}{\phi}$)	u				使役態		($\frac{\phi}{s}$)	ase(-ru)					
		達 量 法	肯定	($\frac{a}{\phi}$)	u ^{※3}		条 件 形	通 常 無順序	順 序 以前		($\frac{1}{\phi}$)	ta	受身態	詞 形 成	($\frac{\phi}{r}$)	are(-ru)					
			否定	($\frac{a}{\phi}$)	nu						($\frac{1}{\phi}$)	eba			($\frac{\phi}{ra}$)	e(-ru)					
			過去	($\frac{1}{\phi}$)	ta						($\frac{1}{\phi}$)	neba	可能態		($\frac{\phi}{r}$)	are(-ru)					
			伝達	($\frac{a}{\phi}$)	u						($\frac{1}{\phi}$)	u	($\frac{\phi}{r}$)		are(-ru)						
	止 法	聞 法	肯定	($\frac{a}{\phi}$)	u						($\frac{1}{\phi}$)	ta	担い手待遇	助 辞	($\frac{\phi}{r}$)	are(-ru)					
			否定	($\frac{a}{\phi}$)	nu						($\frac{1}{\phi}$)	ta			($\frac{1}{\phi}$)	mas(-u)					
			過去	($\frac{1}{\phi}$)	ta						($\frac{1}{\phi}$)	te			($\frac{1}{\phi}$)						
			命令	($\frac{a}{\phi}$)	e o						($\frac{1}{\phi}$)	oR			($\frac{1}{\phi}$)						
	呼 掛 け 法	意 定 法	肯定	($\frac{a}{\phi}$)	una						($\frac{1}{\phi}$)	oR			($\frac{1}{\phi}$)	oR	to[mo]	※1 nuはNに交替し得ます。 ※2 oRと競合する場合があります： dek'i-ru-daroR デキルダロウ、 dek'i-joR デキヨウ。 ※3 maJと競合する場合があります： wakar-anu-daroR ワカラヌダロウ、 wakar-umaJ ワカルマイ。 ※4 本稿では g と η の列を持たない標準語をとります。			
			否定	($\frac{a}{\phi}$)	maJ						($\frac{1}{\phi}$)	dzu			($\frac{1}{\phi}$)						
			通常	($\frac{u}{\phi}$)	oR						($\frac{1}{\phi}$)	phi			($\frac{1}{\phi}$)						
			勧誘	($\frac{u}{\phi}$)	oR						($\frac{1}{\phi}$)	phi			($\frac{1}{\phi}$)						

第2表 助 辞

第2表 助 辞

- ※1 nuはNに交替し得ます。
 ※2 oRと競合場合があります：
 dek'i-ru-daroR デキルダロウ、
 dek'i-joR デキョウ。
 ※3 maJと競合場合があります：
 wakar-anu-daroR ワカヌダロウ、
 wakar-umaJ ワカルマイ。
 ※4 本稿では g と r の別を持たない標準語をとります。

二・三の問題点

(I) 来ル・スル　来ル・スルは母音が特定されていない母音語幹動詞です。その母音は主に接合される助辞の結合要素、一部境目のしるし（十ないし）と尾助辞の頭の母音によって決定されます。

(二) 来_L (i) ($\frac{1}{\phi}$) の場合、母音_上 = : k(i/u/o)-($\frac{1}{\phi}$) ta → ki-ta 来タ
k(i/u/o)-($\frac{1}{\phi}$) te → ki-te 来テ k(i/u/o)-($\frac{1}{\phi}$) tari → ki-tari 来タリ k(i/
u/o)-($\frac{1}{\phi}$) nagara → ki-nagara 来ナガラ k(i/u/o)-($\frac{1}{\phi}$) φ → ki ヰ; k
(i/u/o)+($\frac{1}{\phi}$) ta (-i) → ki+ta (-i) 来タ (-i) k(i/u/o)+($\frac{1}{\phi}$) tagar (-u) →
ki+tagar (-u) 来タガ (-u) k(i/u/o)+($\frac{1}{\phi}$) mas (-u) → ki+mas (-u) 来マ
(-u)。 (iii) -($\frac{\phi}{I}$) の場合、母音_上 = : k(i/u/o)-($\frac{\phi}{I}$) u → ku-ru 来ル k(i/
u/o)-($\frac{\phi}{I}$) una → ku-run-a 来ルナ k(i/u/o)-($\frac{\phi}{I}$) eba → ku-reba 来レバ。
(iv) ~S他 ([$\frac{I \rightarrow \phi}{\phi}$], ($\frac{\phi}{I}$), ($\frac{\phi}{\phi}$), ($\frac{2}{\phi}$), ($\frac{\phi}{S}$), ($\frac{\phi}{I}$), ($\frac{\phi}{[ra]I}$)) の場合、
母音_上 o : k(i/u/o)-($\frac{I \rightarrow \phi}{\phi}$) j → ko-j 来ヅ k(i/u/o)-($\frac{\phi}{j}$) oR → ko-joR
来ヨ k(i/u/o)-($\frac{U}{\phi}$) maJ → ko-maJ 来ブ k(i/u/o)-($\frac{2}{\phi}$) N → ko
N 来ハ k(i/u/o)-($\frac{2}{\phi}$) dzu → ko-dzu 来ヅ k(i/u/o)-($\frac{2}{\phi}$) neba → ko-
neba 来ネ; k(i/u/o)+($\frac{-2}{\phi}$) na (-i) → ko+na (-i) 来ナ (-i) k(i/u/o)+
($\frac{\phi}{\phi}$) ase (-ru) → ko+sase (-ru) 来サヤ (-u) k(i/u/o)+($\frac{\phi}{I}$) are (-ru) → ko
+tare (-ru) 来ハラ (-u) k(i/u/o)+($\frac{\phi}{[ra]I}$) e (-ru) → ko-[ra] re (-ru) 来

〔ラ〕
(二) スル (i) $(\frac{a}{\phi})$ の場合、母音は $e : s(e/u/\phi/i)(\frac{a}{\phi}) N \rightarrow se-N$ や
 $s(e/u/\phi/i)(\frac{a}{\phi}) dzu \rightarrow se-dzu$ や $s(e/u/\phi/i)(\frac{a}{\phi}) neba \rightarrow se-$
 $neba$ や nen 。(ii) $(\frac{\phi}{i}) u \dots, (\frac{\phi}{i}) e \dots$ の場合、母音は $o : s(e/u/\phi/i)-$

[illegible]

(III) ヨウ(ダ)・ソウ(ダ)・ラシイ joR ヲウ(ダ) [huR フウ(ダ)・mias] ニ
タイ(ダ) soR ソウ(ダ)は用言の語形の要素というより、いわゆる形容動
詞語幹と同じよう、連辞の後接を予定して存在する体言、ないしは、
体言の要素といえるものと思われます。このうち、soR は普通の体言
と全く同じ文論上の位置に存在します。泣ク人ダ。泣イタ人ダ。泣
クヨウダ。泣イタヨウダ。これが普通の体言や形容動詞語幹とこと
なるのは、後二者が用言の連体形に修飾されることを予定せずに存
在するのに対し、それに修飾されることを常に予定して存在する点
にあります。soR は造語要素として働く用言の語幹(子音語幹動詞で
はその音声化形Ⅱ不定形)に後接して複合的体言をつくる、やはり

造語要素となつてゐるところの体言と同じ造語法上の位置を占めま
す・泣_キ虫_ヲ。泣_キソウ_ヲ。普通の体言が独立して自由に用いられ
るのに対し₈₂は常に用言の語幹に後接して複合的体言(形容動詞
語幹)をつくる造語要素として存在する点に両者の著しい相違が見
出されます。

ras₁(₂)ラシ(₁)は外容から見てナ(₁)やタ(₁)と同じ形容詞の語幹
としてあります。後二者は用言(動詞)の語幹につらなつて存在す
るのに対し、前者は用言の連体形に修飾されることを予定して存在
します・島₍₂₎ラシ₁。島_{タツ}タラシ₁・新シイラシ₁。新シ_{カッ}
タラシ₁・泣_クラシ₁。泣_イタラシ₁。たしかに、推量形・伝聞形をつ
くる_{dar₁}、_{sor₁}daに似ていますが、これらが文末に固定して存在
するのに対し、ras₁(₂)は形容詞として再展し得る所に著しい相違が
認められます・泣_イタソウ_ダ(必ず文末)。泣_イタラシ_カッタ人ハ
……。ここでは、これを用言の連体形に修飾されることを予定して
存在する特殊な形容詞と仮に考えておくことにします。

①補助動詞・接合動詞 動詞のかたちは、前述のよう、(1)語幹プ
ラス語尾助辞、(2)語幹プラス語幹助辞の二つの方法によつてつくら
れます。アスペクト・やりもらい(提供態・近供態・受納態(宮
田))・ころみ(実験態・提示態(宮田))等はこの二つ以外の方
法である(3)接続形プラス補助動詞によつて示されます。補助動詞は
抽象的意味を持つとはいへ、全く独立し得ない語幹助辞となり、
独立し得るものです・i₍₁₎-ruイ₍₁₎・si₍₁₎ma₍₁₎-uシマ₍₁₎・a₍₁₎-uア₍₁₎、

mo₍₁₎ra₍₁₎-uモラ₍₁₎・ku₍₁₎re₍₁₎-ruクレ₍₁₎・mi₍₁₎-ruミ₍₁₎・mi₍₁₎se₍₁₎-ruミセ₍₁₎・ok₍₁₎-u
オ₍₁₎。

(3)の手段による語の形成は相当規則的であり、それらは動詞の形
態となるという考えは強力に述べられています。しかし、もし、文
法形態の認定に規則性だけをたてにとれば、(4)語幹(Ⅱ不定形)プ
ラス接合動詞によつてつくられる複合動詞(例……su₍₁₎g₍₁₎-ru)……
hadzime₍₁₎-ru)……owa₍₁₎-ru)も文法的形態としなければならなくな
り、記述は膨大になる恐れがでます。(4)による語の形成はいかに規
則的なものであれ、(1)(2)と外容上かけ離れ、語彙的手段による語形
成と見なければならぬでしょう。(3)によるものは文法的形態と語
彙的手段による語の形成のちょうど中間にある、いわば、語彙・文
法的手段による語の形成であり、(4)のように造語法の個所で扱わな
いと共に、(2)からもはっきりと区別した所で論じなければならぬ性
質を持つと思われます。

(Ⅳ)一次的文法形態と二次的文法形態 前述のように(125頁)、
一次的文法形態とは尾助辞のみによつてつくられる文法上のかたち
であり、二次的文法形態とは尾助辞と接尾助辞によつてつくられる
文法上のかたちをいいます。

呼掛け法のかたちは一次的文法形態として形成されます。一次的
文法形態として形成されてその呼掛け法に対立する伝達法のかたち
は伝聞形を持たず、叙述形(例 de₍₁₎ki₍₁₎-ru デキル、de₍₁₎ki₍₁₎-ta デキタ)
と推量形(de₍₁₎ki₍₁₎-jo₍₁₎R デキヨウ)の対立も不完全です(なぜなら推量

形過去がありません）。接尾助辞 *darōR*・*soRda* による二次的文法形態はそれをみごとに整備し、かつ、*oR* によってつくられる一次的文法形態が悩む多義（推量形・意志形・勧誘形の外容が一致してしまうという問題）を或程度解決します。*darōR* を持つ二次的文法形態としての推量形が勢力を増大させ、*oR* による一次的文法形態としての推量形がすたれる構造上の原因の一つはここに求められましょう。（現代国語では、尾助辞のみによる単一的な形態がすたれ、尾助辞・接尾助辞による複合的な形態が増大する傾向が認められます）。

連用形中、接続形・同時形・例示形も一次的文法形態です。尾助辞 *oR* によってつくられるそれらに対立する条件形も一次的文法形態です。一次的文法形態としてはこれだけで成立つ条件形に、接尾助辞の *nata/to/ra*, *no/to/hu* は新たに二次的文法形態のかたちで、順接・逆接と通常・仮定の対立を導入し、かつ、順接通常形に以前・非以前の対立を入れこみ、*oR* によるかたちを順接通常無順序形に位置づけて、条件の表現を重層化し、整備します。

以上のような文論のかたちでまとめられる一次的文法形態と二次的文法形態の区別を語論のかたちにもちきたらせば、語幹助辞によって形成されるかたちは語論上の一次的文法形態であり、Ⅲの③として述べた補助動詞によって形成される複合動詞は語論上の二次的文法形態といえましょうか（これについては今後もう少し考えてみたいと思います）。

三 音のてだて

伝統的活用体系に見出される「活用語尾」を「形態音素論」的に観察することを試みても、そこに「内在」（石井―1頁）する組織をとらえることは非常に困難であるよう筆者には思われます。例えば、伝統的活用体系では五段活用動詞の未然形の *a* は否定の助動詞「ない」「ぬ」と共に受身の助動詞「れる／られる」、使役の助動詞「せる／させる」に結合するため動詞が外容を変えて出す母音と見られますが、なぜ否定（筋立て）や態にかかわる助動詞が *a* をとり、他の助動詞はとらないのでしょうか。否定と態には何か内的な関連があるのでしょうか。それとも、活用語尾全体は無秩序な語形変化なのでしょうか。しかし、動詞に子音語幹と母音語幹の区別を認め、文法的意味を示す助辞との間に結合要素を設定すると、未然形の *a* と思えていたものは、一方では、*na-i-nu(n)·dzu-neba* という、呼掛け法以外の否定の意味を共通に持つ助辞が子音語幹と結合する際にとる結合母音であり、他方では、*(e)age-re·(e)ae-tu* という語幹助辞の頭の母音であることがあきらかになり、前者の *a* は呼掛け法以外の否定の意味と呼応する機能を持つ結合母音、後者は単なる形態素の個別的特徴であることがわかります。ここに筆者は国語用言の「形態音素論」への曙光を見る思いがします。

(I) 語幹 動詞の語幹中では国語の基本的音声体系に属する全ての

音素の存在が原則的に可能です。そこには*i*の前以外でも口蓋化子音があらわれ得ます…〔tʰakasu〕茶化ス、〔tʰoromakasu〕チヨロマカス、〔ʰaberu〕喋ル、〔ʰou〕シヨウ。また、*p*の存在も可能です…〔paratsuku〕パラツク。^{注16}

註記 (〔ʰʰʰʰ〕等は〔j〕と結合した複合子音とする考えもあります) が、ここでは口蓋化された単子音と考えておきます。子音の右肩の、は口蓋化子音を示します。

しかし、語幹末の音素には厳然たる制限がもうけられています。

子音語幹の末尾にある子音は一(五)でふれた通り、*b·m·s·t·n·r·k·g·w*／ゝのみであり、母音語幹の末尾にある母音は前母音*e·i*のみです(来ル・スルに関しては二三(I)、及び149頁註記参照)。

(一)子音語幹 子音語幹末には*i*の前以前に口蓋化子音があらわれず、かつ、*p·h·d·dz·j*が見出されません。それら子音を語幹末に持つ子音語幹(例えば、*kap, kah, kadz, kaj* また *kaʰ*)を人工的につくり、語形変化をさせ、日本人に与えると自分の未知の標準語動詞としては認められないという反応が返って来ます。この位置でのこれら子音の不在は、たまたま国語動詞にこれら子音が使われていないという「偶然のすきま」ではなく、構造的可能性を欠く「構造的あきま」と考えてよいでしょう。

語幹はいかなる尾助辞に接合されても自己の同一性を保ち、他の語幹との混同を外形的に極力避けねばなりません。^{注17} そのため語幹はいかなる母音の接合を受けても他の子音との対立が保存されるような子音をその末尾に選びます。語幹末に見出される子音はゝを除き、

いかなる母音が後行してきても他の子音との対立を失いません。^{注18} 子音語幹動詞中最も多く動詞が語幹末に持つ*r*(鈴木丹—137頁)を例にその様子を示します…*kar·u*刈ル、*kar·adzu*刈ラズ、*kar·e*刈レ、*kar·oR*刈ロウ、*kar·inagara*刈リナガラ。それに対し、*d*と*dz*は*a·o·e*の前で対立しますが、*i*と*u*の前で互の差を保つことができません(*i*の前では*dz*しか、*u*の前では*dz*しかあらわれません)。しかし、*i*は重要な結合母音ですし、*u*は重要な助辞です。*kad*及び*kadz*という存在しない語幹をつくり、その様子を例示します…*kad·adzu·kadz·adzu, kad·e·kadz·e, kad·oR·kadz·oR*。しかし、*kadz·u, kadz·inagara*。

ゝと*j*も同様で、*a·u·o*の前では対立しますが、*i*と*e*の前では対立しません。しかし、*i*は結合母音として働き、*e*は命令形及び条件形の*eda*の頭の母音です。*kaj*という存在しない語幹を新造しその様子を示します…*kaʰ·u*買ウ、*kaʰ·u*買ウ、*kaw·adzu*買フス、*kaj·adz·kaʰ·oR*買オウ、*kaʰ·oR*。しかし、*kaʰ·e*買エ、*kaʰ·inagara*買イナガラ(*kaj·e, kaj·inagara*は存在し得ません)。

以上のような子音の対立が失なわれ、語幹の混同を避けるためにはまず二つの方法が考えられます…①対立が失なわれる子音を双方共語幹末で使用しない、②一方だけを使い他方を決して使わない。*d*と*dz*の場合は①の手段がとられ、ゝと*j*の場合は②の方法がとられ、*j*の使用を禁止し、ゝのみの使用を許します。ゝは*a*の前で*w*に交替しますが(第3表参)、*w*は*a*の前にしか現れませんので問題は起こりません。

語幹末に於て（iの前以外で）口蓋化子音が使われないのも、a・u・oの前のそれが国語音韻体系の中で或程度の特異性を担っている（McCawley—63頁以下）ということより、それがa・u・o・iの前にしかあらわれず、対応する非口蓋化子音と、eとiの前で対立がなくなり、語幹の混同がおこり得るという構造上の要因をもってまず説明されましよう。語幹末で口蓋化子音の使用を禁じ、非口蓋化子音のみの使用を許しているわけですから、²⁰とjの場合と同様②の手段がとられているということになります。もっとも、jを²⁰の口蓋化子音と考えれば、jの不在と口蓋化子音の不在は統一的に説明されます。

d・dz・j及び口蓋化子音の不在は以上のように説明されますが、hの不在は以上のように説明できません。hはいかなる母音の接合においても（i・eの接合における口蓋化子音との対立の消失を除き）他の子音との対立の消失はあり得ません。これに関連して思っておこされるのは、pやd・dz・j及び口蓋化子音を語幹末に持つ新造語を標準語使用者はあり得ない動詞と感取するのに対し、hを語幹末に持つそれには、もしかすると未知の古語かもしれないという反応があり得ることです。これはp・d・dz・j等の不在とhの不在とは構造上同一水準にあるとはいえないことを物語るものといえましよう。hの不在は「国語音韻の変遷」の「第一期」（橋本—56頁以下）の語頭有声音排除則（有声音は語中を表示する機能を負います）が、「第二期」においてくずれることに対応的にあらわれる語中F排除則（Fは語頭を表示します）から尾を引くものです。現代語では

語中F（h）排除則は撤廃されていることから見れば、語幹末のhの禁止は消極的な語幹末表示として機能しているとかいえないものです（動詞中でhがあれば、それは子音語幹動詞の語幹末ではないことを表示します。p・d・dzらも同様の機能を負っています）。

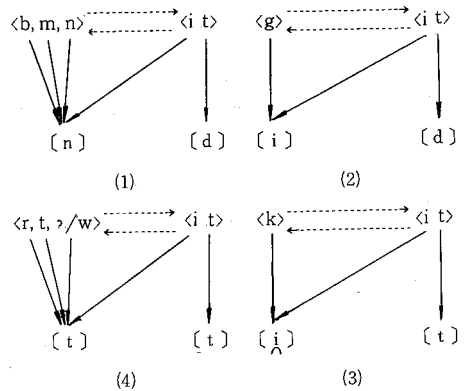
現代語に於て語頭や母音間のpは外来語、オノマトペ等の特殊語であることの表示する機能をふりきれずにいるため子音語幹の末尾でのその不在は当然といえましよう。

iの前以外に口蓋化子音は語幹末にあらわれないと述べましたが、聞き手敬讓動詞をつくる語幹助辞²⁰essにoRが接合する場合、その語幹末のsは's'と口蓋化され、唯一の例外を構成します。

（二）「音便」 子音語幹とtで始まる尾助辞²⁰te・taruとが結合すると、s語幹（sで終る語幹—以下同様）を除き、語幹末子音と尾助辞の結合母音iとがつくる前狭母音音節は語幹末子音の音声的性質に従い、先行する音節を閉じる（n）（Nはねる音）（t）（Tつまる音）（i）（J）に転化すると共に、尾助辞の頭のtも語幹末子音の音声的性質に従い、[d]と有声化したり、また、[t]と無声のまま残ったりします。より詳しく述べます。（1）語幹末子音b・m・nは結合母音iとあわさって[n]となると共にtを[d]に発現させます：tob(⓪)u→tob-u 飛ぶ・tob(⓪)ja→tob-ita→toN(⓪)da(ton da) 飛ンタ' tom(⓪)u→tom-u 富む・tom(⓪)ja→tom-ita→toN(⓪)da (tonda) 富ンタ' sin(⓪)u→sin-u 死ぬ・sin(⓪)ja→sin-ita→sin(⓪)da (yinda) 死ンタ。（2）語幹末子音gは結合母音iとあわさって[i]となると共にtを[d]に発見させます：kag(⓪)u

→kag-u 嗅く・kag($\frac{1}{\phi}$)ta→kag-ita→ka[(-)da (kaida) 嗅くイタ。(3) 語幹末子音 k は結合母音 i とあわさって〔i〕となると共に、t を〔t〕と発現させます：kak($\frac{1}{\phi}$)u→kak-u 書く・kak($\frac{1}{\phi}$)ta→kak-ita→ka[(-)ta (kaida) 書くイタ。(4) 語幹末子音 r・t・w は結合母音 i とあわさって〔t〕となると共に、t を〔t〕と発現させます：kar($\frac{1}{\phi}$)u→kar-u 刈ル・kar($\frac{1}{\phi}$)ta→kar-ita→kaT(-)ta (katta) 刈きッタ・kat($\frac{1}{\phi}$)u→kat-u (katsu) 勝かッ・kat($\frac{1}{\phi}$)ta→kaT(-)ta (katta) 勝かッタ・ka($\frac{1}{\phi}$)u→ka-u 買う・ka($\frac{1}{\phi}$)ta→kaT(-)ta (katta) 買かッタ。これらの変容は位置の一方的影響による語幹末子音の変形ではなく、語中での形態素間の相互影響における語幹末子音と結合母音 i を伴う助辞の頭の変容的発現です。今、形態素素をへんでくくって示すなら、以上は第3図のように図示され、式化するなら次のようになります(→は影響を示し、↓は発現を示します)。(1) ϕ ・m・n↔〔t〕→〔nd〕、(2) ϕ ・g↔〔t〕→〔gd〕、(3) ϕ ・k↔〔t〕→〔kt〕、(4) ϕ ・r・w↔〔t〕→〔tr〕。

たとえば、それが尾助辞の結合母音 i を含んでの変容であれ、上記の変容において語幹末子音の弁別能力は半分以下に低下します。他の子音助辞に伴なわれる結合母音、或は、助辞の頭の母音に接合された場合の語幹末子音の変容と、上記の変容とを比較して表示すると第3表のようになります。表でわかる通り、他の位置においても語幹末子音はそれなりに変容しています。しかし、変容しながらも語幹末に見出される9単位の子音の対立をしっかりと保存します。それに対し、(i)ta, (i)ne, (i)hari の前では〔i・n・i・t〕しかあらわれず、僅



第3図 語幹末子音とtを頭にもつ尾助辞の相互影響とその発現

〔語幹末子音〕										助 辞	
s	b	m	n	g	k	t	r	w	ts	?	<e・oR・eba>
										w	<(a)neba・(a)nu (a)dz>
										?	<u・una・(u)ma>
										?	<(i)nagara・(i)phi>
ʃ	b'	m'	n'	g'	k'	t'	r'	w'			<(i)ta・(i)te・(i)tari>
ʃ(i)			n		i	t					

第3表 語幹末子音の変容

か四単位の対立しか成立しません。かくして、この位置では、語幹末子音のみでことなっている語幹を持つ動詞では語形の差が音声的に消失することが起こります(ただし、アクセントという手段が残されますが、今はそれに言及しません)：tob-u 飛とブ・ton-u 富とム、[fonda] 飛とンタ・富とンタ。kar-u 刈かル・kat-u 勝かッ・kau-u 買かウ、[katta] 刈かッタ・買かッタ・勝かッタ。しかしながら、(2)でgは〔t〕を〔d〕、(3)でkは〔t〕を〔t〕に発現させるため、語幹末で無声・有声の特徴で対立する唯一の子音であるk・gはその対立を助辞部分の頭に移して保存します：kak($\frac{1}{\phi}$)u→kak-ita→ka[(-)ta (kaida) 書くイタ・kag($\frac{1}{\phi}$)ta→kag-ita→ka[(-)da (kaida) 嗅くイタ。ですから、結果的には四単位ではなく五単位の対立が成り立つことになります。

以上のような語幹と尾助辞の相互影響による融合的変容は両者を緊密に合体させ、一体化した語形を形成します。この一体化は理論

的には弁別力を半分近く犠牲にして達成されるものですが、実際上はアクセント及び語幹の他の部分での示差力によって弁別力をおぎない、事実上おきる混乱（混合）は微々たるものに過ぎません。動詞のいわゆる「音便」は益多くして害少しい体化表示といえましょう。

(三) 母音語幹 来ル・スルを除き、母音語幹末には a・o・u という母音が存在しません。

末尾の e・i の前に p・p が存在しないのは、p・p の特殊性（三 (I) (一) 参）によって説明されます。e 語幹動詞（「下一段活用動詞」）では「ザ行」が「備わっている」（鈴木丹一「6頁」）のに対し、i 語幹動詞（「上一段活用動詞」）では「ザ行」が「備わっていない」のは、d と dz の対立が e の前では成立するのにに対し、i の前では両者の対立が消失するという純音韻論的理由によります：mede-ru 愛デル・made-ru 混ゼル。しかし、had-i-ru 恥ジル。i 語幹動詞では「ザ行」を構造的に欠くため、語義の区別に参加する語幹末母音前の子音は e 語幹動詞より一つだけ少なくなります。

(四) 子音語幹の優越性 最小の母音語幹は子音・母音各一つずつで成立ち得ますが、最小の子音語幹は母音は一つとしてもそれをはさむかたちで子音が2つなければ成立しません。しかし、最小の手段を使うことによる母音語幹の造語（幹）上の可能性は非常に小さくめいっばいに使われたとしても e 語幹として ?・k・g・s・dz・t・d・n・h・b・m・r に始まる十二語幹、i 語幹としては ?・k・g・s・dz・t・n・h・b・m・r に始まる十一語幹がつくれるに過ぎません。それに対し、最小の手段を使うことによる子音語幹の造語（幹）上

の可能性は非常に大きく、語幹末で九単位の子音、その前で五単位の母音、その前では少なくとも十二単位以上の子音の選択可能性があり、実に多数の語幹を造り出すことができます。これと同じ造語幹上の可能性を母音語幹が獲得するのは子音・母音各二つの二音節をそろえなければなりません。子音語幹は、母音語幹が子音・母音二つをそろえてつくるだけのものを子音二つ母音一つでつくりだす可能性を持ちます。ですから、最小の手段でつくれる子音語幹動詞（例えば *ori-ru*、*ori-ta*）は最小の手段でつくれる母音語幹動詞（例えば *ori-ru*、*ori-ta*）に較べるべきではなく、二音節によってつくれる母音語幹動詞（例えば *ori-ru*、*ori-ta*）に

助 辞		子音語幹	母 音 語 幹	
例		kak	tabe	ori
尾 助 辞	母音助辞	(<i>u</i>) kak-u	tabe-ru	ori-ru
	子音助辞	(<i>dz</i>) kak-adzu	tabe-dzu	ori-dzu
語幹助辞	母音助辞	(<i>ta</i>) kak+ase-ru	tabe+sase-ru	ori+sase-ru
	子音助辞	(<i>na-i</i>) kak+ana-i	tabe+na-i	ori+na-i

第4表 子音語幹動詞の語形と母音語幹動詞の語形

比較するのが適当です。第4表は最小の子音語幹と二音節の母音語幹からつくられるそれぞれの語形の一部を比較したのですが、表でわかる通り、子音助辞がつく限り、両者の長さは同じですが、母音助辞がつくと母音語幹からつくられる語形の方が子音語幹からつくられる語形より一音節だけ長くなります。ここにも子音語幹の母音語幹に対する経済性がみとめられます。母音尾助辞は五つある所、子音尾助辞は九つあり、後者が量的に優越しますが、それは最小の子音語幹からつくられる

語形とそれに比肩し得る二音節母音語幹からつくられる語形の音節数の乖離をおさえることに少なくとも資しているといえましょう（子音尾助辞の量的優越は母音語幹の非経済性に関係していると思われる）。
てよいよう思われます。

また、子音語幹で「音便」がおこると、拍数は減少しないとしても音節数は一つ減少します（*ka-ti-sa* 勝ッタ（三拍二音節）。しかし、母音語幹では「音便」がおこりませんので、音節数の減少はおこりません（*ka-le-sa* 勝テタ・*ka-ti-sa* 借リタ（三拍三音節）。ここにも子音語幹（ただし *s* 語幹を除く）の経済性を見ることができましよう。

また、「音便」は前述のよう語幹と語尾を融合させ一体化した語形をつくり出しますが、母音語幹動詞では「音便」がおこらず、語幹・語尾の一体化の表示を特に行なうことができません。

子音語幹動詞の母音語幹動詞に対する量的優越は古代語から連綿として続きますが、それはこれらの構造上の優越性に裏打ちされていると思われまう。しかし、母音語幹動詞は量的におとるがゆえに、不定の程度が高く、情報量が多く、強い表現力をそなえることになります（頻度の低い記号は不定の程度が高く、情報量が多くなりまう）。受身態・使役態・可能態動詞、また担い手敬讓動詞は母音語幹をとってその高い情報量をささえます。

(II) 語幹助辞 語幹助辞は形容詞形成助辞と動詞形成助辞とにわかれます。

形容詞形成助辞は全て母音 *a* を持ち一音節からなる子音助辞で

す。そのうち、否定形容詞をつくるものは鼻的流出を持つ前舌閉鎖子音 *n*、願望態形容詞をつくるものは鼻的流出を持たない前舌閉鎖（無声）子音 *t* によって特徴づけられます（*na-ti*、*ta-ti*）。

動詞形成助辞のうち、本来的な態（使役態・受身態・可能態）のかたちをつくるものは母音助辞であり、かつ、*e* を末尾にもち、統一されたグループをなします。このうち、自動と他動の両極端に立ち、意味上尖鋭に対立する使役態動詞と受身態動詞をつくる助辞は頭に母音 *a* を、末尾に母音 *e* を共通に持ち、ことなりはただそれにはさまれる前舌子音の噪子音 *s* と鳴子音 *r* の対立によって形成されます（この *s* は *ho-ti* 乗ル・*no-se-ti* 乗セル、*no-ti* 伸ビル・*no-ba-ti* 伸バス、*hi-ti* 似ル・*hi-se-ti* 似セル、*na-ga-re-ti* 流レル・*na-ga-si* 流ス等における他動詞の *s* と恐らく関連をもつものと考えられますが、その詳細はわかりません）。この二つの助辞の結合子音は *a・e* にはさまれる子音をそれぞれ繰返すかたちで存在しますが、それは語幹助辞が *s・r* という最小の対立で差異を形成しているので当然考えられるその補強といえましよう（*sa-ga-e*、*sa-are*）。可能態を示す助辞は *wa* と *wa* の頭の母音 *a* と両者の対立を形成する子音 *s・r* を切り取ったかたちで存在します。可能態が態は態でも使役態でも受身態でもない態であるため、この切り取りは当然考えられる変形（歴史的に見れば推移）の筋道の上に立つといえましよう。ただ、その結合子音 *r* は、その発生と共に受身態への意味的近縁性（共に動作・状態の他動性を表現しません（城田 *b* 7 頁））を示しています。自由出沒要素「*a*」が顕在化されるとその出自と意味の近

縁性は外形の一致によって示されることになります。

担い手敬讓動詞をつくる語幹助辞は、すでに述べた通り、多数の成員を擁し、がっちりとした組織をくむ態の体系に組み込まれている受身態動詞をつくる語幹助辞 be と外形が一致し、それゆえ動詞語幹助辞中でやや浮上った存在となります。

残る希望態動詞をつくる $taga$ 、聞き手敬讓動詞をつくる mas は子音助辞であり、かつ、子音語幹を形成する点似通います。前者は形容詞形成助辞 sa と形容詞語幹に接合する動詞形成要素 gar (例 $atarasi + gar$ (v) 新シガ(ル)) とに分解できるもので、語幹助辞中最も長く、最も長い尾助辞 $nagara$ と外容上よく似ています。 mas は動詞語幹末で唯一の列外をなす口蓋化子音を出すことについてはすでに触れました。

語幹助辞は全て頭の音節に母音 a を持ちます。唯一の例外は e (v) ですが、それは頭の a を結合要素の方へ逐いやった所に成立つ語幹助辞です: ($\frac{a}{[ra]r}$) e (v)。

③ 結合要素 結合要素として使われる母音は $a \cdot u \cdot i$ 、子音は $r \cdot j \cdot s$ 。計六単位しかありません。

(1) 結合母音

(1) a 結合母音 a は呼掛け法以外の否定助辞 nu (N) 'neba' dzu 及び na (v) を子音語幹に結合させます。 a とこれら否定助辞とは子音語幹に於て相互予定関係にあり、自然の音の流れに従っていえば、前者は後者の後続を予告するものといえましょう: $kak-anu$ 書カヌ

(書カン)、 $kak-aneba$ 書カネバ、 $kak-adzu$ 書カズ、 $kak + ana$ (v) 書カナイ。

(2) u 結合母音 u は意志形 (呼掛け法) の否定助辞 ma を子音語幹に結合させます。両者は子音語幹に於て相互予定関係にあり、前者は後者の後続を予告します: $kak-uma$ 書クマイ。助辞中結合母音 u をとるのは ma のみですが、 u が尾助辞 ($\frac{u}{[ma]}$) として広汎に働いているため、この結合母音 u を尾助辞とし、尾助辞 ma を接尾助辞として解釈しようとする傾向がみとめられます。それは、例えば $kak-uma$ を $kak-u-ma$ (・は尾助辞と接尾助辞の境目を示します) と解釈し、それに応じて、母音語幹と ma の接続を正則的な $tabe-ma$ タベマイ、 $si-ma$ シマイ、 $ko-ma$ コマイから、 $tabe-ru-ma$ 、 $su-ru-ma$ 、 $ku-ru-ma$ に整えようとするものです。これは u を結合母音体系から排除し、そこを $a \cdot i$ のみで整備し、 u を尾助辞に専業化せようとするうごきに裏打ちされています。

(3) i 結合母音 i は以上あげた以外の子音助辞 ba 、 te 、 $tari$ $nagara$ (v) (以上尾助辞) ta (v) $tagar$ (v) mas (v) (以上語幹助辞) を子音語幹に結合させる機能を担います: $kas'ita$ 貸シタ、 $kas'ite$ 貸シテ、 $kas'itari$ 貸シタリ、 $kas'inagara$ 貸シナガラ、 $kas'imagar$ 貸シマシタ、 $kas'itagar$ 貸シタガ、 $kas'imagar$ 貸シマシタ。 i は意味的統一をなす助辞とも呼応関係になく、また、一つの助辞に専有される結合母音でもなく、ただ結合の機能に徹する結合母音です。

(2) 結合子音

(1) s 結合子音 s は使役態を示す母音語幹助辞を母音語幹に結合させます。それは語幹助辞自身が持つ子音を繰返すもので、両者は文字通り呼応関係にあります。・tabe + sase(ru)。s は結合子音中唯一の噪子音です。

(2) j 結合子音 j は意志形・勧誘形のかたちをつくる母音助辞 oR を母音語幹に結合させます。これも母音語幹に於て oR そのものを予告するものと考えられます。・tabe + oR タベヨウ。ただし、j は命令法のかたちをつくる母音尾助辞 o を母音語幹に結びつけることもあります。・tabe + o タベヨ。母音 o と j の呼応関係が考えられますが、尾助辞 o を結びつける j は r とゆれるもので、この呼応は完全ではありません。j はこのゆれに於て古めかしい文体を担い、文体的特色を持たない r と対立します。

(3) r それ以外の母音助辞 u_o, una, eba (以上尾助辞) are(ru), o (以上語幹助辞) を母音語幹に結びつけるのは結合子音 r です。個別的助辞に専有されず、活動領域が広く、結合の機能に徹する点、結合子音 r は結合母音 i に対応します。i が代表的結合母音なら、r は代表的結合子音です。i が最も子音に近い母音であり、r が最も母音に近い子音であることは興味深い事実です。

可能態動詞をつくる語幹助辞 e の結合子音 r の前には自由出沒要素としての「e」が付属します。

(三) 先行品詞表示機能 以上のように、結合要素は助辞を語幹に結合させ、一部では後続する助辞の個別、ないし、その意味を予告する役割を持ちますが、それ以外に、先行する品詞を表示する機能も

はたします。特に尾助辞のかたちが動詞・形容詞・体言(連辞)で共通する場合、その機能は結合要素に集中します。例えば、ta の前で i_o はその先行語幹は動詞(例 kas'ita 貸シタ)・(kaT) は形容詞(例 aka-kaTta 赤カッタ)・(daT) は体言(形容動詞語幹)(例 hoN-daTta 本ダッタ、sidzuka-daTta 静カダッタ)であることを表示

動 詞	形 容 詞	体 言	尾 助 辞
(<u>i</u> _o)	(kaT)	(daT)	ta, tari
(<u>e</u> _o)	(kar)	(dar)	oR
(<u>i</u> _o)	(i)	φ	nagara.
(<u>i</u> _o)	(ku)	(de)	φ
(<u>i</u> _o)	(ku')	φ	te
(<u>e</u> _o)	(ker)	(nar)	ebe/aba
(<u>a</u> _o)	(kara)	(nara)	neba,dzu, nu

第5表 品詞と結合要素

します。その様子を表にまとめておきます(第5表)。助辞のかたちが共通しない場合、先行語幹の品詞を表示する機能は助辞自身のかたちも分担します^{注21}。結合要素は、形容詞で k、体言で d・n、動詞では前述のものによって特徴づけられ、互に混ざることなく整然たる対比をかたちづくります。

(四) 尾助辞 尾助辞はゼロ尾助辞と実体的尾助辞が区別されます。

実体的尾助辞はその音節数により、一音節助辞、二音節助辞、三音節助辞にわかれます。三音節助辞は baaba のみであり、これ以上長い助辞は見出されません。実体的尾助辞は、また、母音助辞と子音助辞にわかれます。一音節尾助辞は母音助辞であれ子音助辞であれ、一拍を音節に付加する音節終結音を持つか持たぬかで、一般音節助辞と特殊音節助辞にわかれます(第6表)。

(一) 母音の分布 母音尾助辞は u・e・o で始まりそれ以外の母音

で始まるものではありません。そこに見出されない a・i は結合母音として働きます。みごとな分業というほかありません。尾助辞の頭の構成と結合母音にまたがるのは u のみです。しかし、u を結合母音の体系から排除し、それを a・i に整えると共に u を尾助辞に專業化させようとするうごきがあることはすでに触れた通りです。これら単母音の分布と機能をより詳しく見るために一覽に付します（第7表）。

(二) 命令形 子音語幹で命令形が e でつくられるのに対し、母音語幹では (r) を伴う。o であることは、母音語幹の末尾母音として e があるため、それと異なろうとしているためであることはなにも第7表を見なくとも気付かれます。

命令形は母音語幹に於て、r を介しての i・o、e・o という前母音・後母音のつらなりとしての対比（シンタグマティックなコントラスト）によつて構成されています：ori-ro オリロ、tabe-ro タベロ。子音語幹で o を用いず e を使うのも、また、故ないこととは思われません。数量的調査を行つておらず、その点暫定的発言しかできませんが、子音語幹の語幹末子音の前にある母音は恐らく e が最も量的に少ないのではないのでしょうか。確かに、nag²²e²² 嘆ケ、huse²²e²² 防ケ、kes²²e²² 消セ、sakeb²²e²² 叫ベ、museb²²e²² 咽ベ、eme²² 笑メ、²²ke²² ケレ等々ありますが、これら語幹末子音の前に e を持つ「五段活用動詞」が一番見付けにくいもののように思われます。子音語幹動詞の命令形も語幹末子音を介しての非 e (a/o/u/i) と e のつらなりとしての対比に主にささえられていると見てよいよう

1 音節助辞	母音助辞	一般音節助辞	φ e o, u
		特殊音節助辞	oR
	子音助辞	一般音節助辞	nu, ta, te, dzu
		特殊音節助辞	maJ
2 音節助辞	母音助辞		una, eba
	子音助辞		tari, neba
3 音節助辞			nagara

第6表 尾助辞の外容上の分類

	子音語幹	母音語幹
i	代表的結合母音	語幹末母音
e	命令形助辞	語幹末母音
o		命令形助辞 (r)
u	伝達法現在肯定助辞 (r)	
	maJ の結合母音	
a	(呼掛け法以外の) 否定助辞の結合母音	

第7表 母音の分布と機能

思われます。

命令形は話し手が音声に頼つて聞き手に早くかつ強く働きかけるかたちです。音声的に経済的でありかつ効果的である必要があります。単母音で構成されると共にシンタグマティックな対比を最大に求めて、語幹末の音声的様相に従いその相貌を変える唯一の助辞である肯定命令助辞はその要請に十分こたえるものといえます。否定命令形は肯定命令形との示差のため経済性が犠牲にされませんが、語末での母音のシンタグマティックなコントラストははっきりとしています：tabe-r²²una タベルナ、kak²²-una²² 書クナ。

(三) oR・aR 国語には五つの単母音がありますが、動詞の語形変化

において、第7表に表示されるかたちでその全てが使いはたされま
す。子音（音節開始音）を使わずに単母音（音節中心音）を修飾す
る手段はそれに「引く音」(R)、「はねる音」(N)、「つまる音」(T)
或はJという音節終結音を付加することですが、尾助辞形成に実際
に使用されるのはそのうち「引く音」です。oR・aR。aRによるかた
ちは金田一（b—171頁）により感嘆形の名が与えられていますが、
標準語の中のかなる層に属するものか疑問が残されるので、筆者
は記述からはずしてきたものです。kak aR書カア、tabe raRタベ
ラア。しかし、oRと同じ手段でつくられるものなのでここに触れて
おきます。oRは命令助辞が母音語幹ではoであるため、命令助辞と
ことなる結合子音jをとって、それとの示差を補強します。tabe ro
タベロ、tabe roRタベヨウ。母音語幹の命令助辞の結合子音j（例
tabe roタベヨウ）がすたれ、rが優勢となる背景にはoRの結合子音
jの存在があるためとも考えられましょうか。

(四) 単音節尾助辞と多音節尾助辞 次に単母音を修飾する手段はそ
の前に子音を付加すること(nu, ta, te, dzu)それに音節終結音を付
加すること(ma)です。それに次ぐ手段は音節をつらね、多音節化
すること(una, eba, tari, neba, nagara)です。終止形をつくる助辞は
Ebaを例外として単音節助辞であり、多音節助辞は連用形に配備さ
れます。

(五) 尾助辞の子音 尾助辞に使われる子音は次のものです。t・(d)・
dz・n・m・b・r・g。tを除けば有聲の非摩擦音です。^{注23}このうちb・
r・gは尾助辞の頭に立つことがありません。頭に立つ子音はmを除

き前舌の非摩擦音です。iの前以外の口蓋化子音もなければまたp・
s・k・ʔ・w・jがありません。そのうちには子音語幹末にあつても
「音便」に襲われないsが混ざります。

(六) 否定助辞 否定（の意を持つ）尾助辞を肯定（の意を持つ）尾
助辞の対応は或程度整えられています。否定尾助辞は、不定形の否
定のdzuと意志形の否定のmaを除き、nという要素を共通に持ち
ます。nu(N) una neba。また、呼掛け法を除き、結合要素として(a)_φ
を持ちます。(a) nu(N), (a) neba, (a) dzu (否定の語幹助辞もこの二
つの共通性につらぬかれています)。nを持たずかつ結合要素(a)_φを持
たないのはmaのみです。ここにもmaの孤立性がみとめられま
す。nu nebaと肯定の助辞とは助辞の外容に関してのみ云えばnの
存在・非存在によってのみその差がつけられています。その差を剩
余的にささえるのが結合要素の役目です。(a) nu (a) nu, (a) eba・
(a) neba。

(七) 母音助辞と子音助辞 呼掛け法のかたちはmaを除いて全て
母音助辞によってつくられ、不定形は子音助辞によってつくられま
す。このことは呼掛け法をつくる助辞の持つ結合要素は(u)を除き全
て結合子音であり、不定形をつくる助辞のそれは、結合母音である
ということに対応します。伝達法では無標のかたち（現在—非過去・
肯定—非否定）が母音助辞uによってつくられ、有標のかたち（過
去・否定）が子音助辞ta・nu (N) によってつくられます。連用形
の一次的文法形態は条件形を除き子音助辞によってつくられます。
一次的文法形態である順接通常無順序条件形は伝達法のかたちと同

じく、無標のかたち（肯定）が母音助辞 *eda* により、有標のかたち（否定）が子音助辞 *neba* によりつくられます。

(ハ) 最短の尾助辞と最長の尾助辞 動詞語形中最小の文法的情報を担う不定形にゼロ尾助辞が配され、次に示される動作・状態と、ある持続性を持ちながら同時に行なわれる動作・状態を示す同時形に尾助辞中最長の *nagara* という三音節助辞が与えられます。いくら「言語記号は恣意的なものである」(ソシユール 92頁)としても、その反対（不定形形成に三音節助辞が使われ、事柄のある長さをもった動きに関与する同時形をつくるでたととしてゼロを用いること）を具体的自然言語である国語に想像することは無理のようです。国語動詞の語形変化の音声的でだてを眺める本稿も、言語記号の全てが全て完全に「恣意的なものである」とはいきれない、ということに触れざるを得ないでしょう。

(V) 接尾助辞 推量法と伝聞法は共に事柄・話・話し手という三項目にかかわるといふ共通性を持ちながら、示す意味は対称的です。前者は事柄が話し手の推量の中にあることを示し、後者はそれが他の話し手から聞いたものであることを示します。それらを示す外容も対称的に構成されています。推量法をつくる接尾助辞 *daoru* は原辞論（形態素論）的観察において連辞 *da* と助辞 *oru* に分解できるのに対し、伝聞法をつくる *soRda* は *soR* と連辞 *da* に分割でき、前者は *[da]* を第一音節に、*[o]* を第二音節に持つのに対し、後者は *[o]* を第一音節に、*[da]* を第二音節に持ちます。

いきり法（叙述法）は推量法的な意味ゼロ、伝聞法的意味ゼロというネガティブに規定される意味を持ちますが、それは接尾助辞ゼロによって示されます。

推量法の聞き手敬讓語形 *daoru* には *[o]* の前に *[j]* がみとめられます。これは聞き手敬讓動詞の意志形・勧誘形・（推量形）(*j-masoru*) にも見出されるもので、聞き手敬讓語形の特徴をなす音声です。

呼掛け法のかたち及び不定形は全て尾助辞によってつくられます。連用形中接尾助辞が関与するのは条件形のみです。

註記 来ル・スルは語幹（末）母音が特定されていない母音語幹動詞ですが、その特定のしかたは二三(II)でふれました。助辞の意味、尾助辞・語幹助辞助辞の音声構成という要素と語幹母音との呼応というかたちで、それを書き改めることができますが、結果にたいした差は出ません。アクセントに関してはふれることができませんでした。稿を改めたく思います。本稿は、今後の考究の足がかりとするための書き改めを予定する試案に過ぎません。

注

注1 例えば、書くという動詞の否定のかたち書カナイが形容詞の外容をとる点からも、動詞の語形変化は用言の語形変化の中で形容詞・連辞（繫辞）と平行して記述されるべきと考えられますが、ここでは対象を動詞に限ることにします。

注2 N ははねる音、T はつまる音、R は金田一 *a* に従い引く音、J は紫田（「方言学概説」一六頁）に従い音節を閉じる *i* を示します。ですから、母音後、音節末の *i* と J は同価です。ゆはゼロを示します。

注3 \ は「または」を示し、「」は省略し得る部分、つまり、自由出沒要素を示します。ローマ字の右肩の・は口蓋化することを示します。例えば *s'* は *[ʃ]* と具体化されます。ただし、*i* の前の子音の口蓋化は三以下で必要に応じて行うだけにとどめます。

- 注4 語幹末子音wに交替するゼロを示します。
注5 今後、結合要素はかつてくくって示します。 nuはNと交替します。
それも便宜的にn(N)と表記しておきます。
注6 ↓は語幹末が子音か母音かにより結合要素を選択し、そのかっこをはくずし、かつ、後述の子音語幹の変形(一、(七)参)が行なわれるものはその変形を行って、かきかえること示します。
注7 管見に属する限り、結合母音・結合子音(連結母音・連結子音)をみること記述し、「動詞無活用論」を広く知らしめたのは清瀬(1971年)です。また、McCawley (1968年) — 95頁、黒田(1960年) — 59 — 60頁参照。
注8 結合要素は、今後、特に必要な場合を除き、いちいち助辞の前に表記しません。助辞とその結合要素の一覧表は第2表として掲げます。
注9 外デ遊べバ、ゴホウビアゲヨウ(無順序形)といえるのに対し、外デ遊プト、ゴホウビアゲヨウ(非以前形)とはいえません。
注10 ドンナニ歩コウガ、平気ダの方は接続助詞と考えます。
注11 不定形は伝統的活用体系で「連用形」といわれているものにあたります。
注12 ④の意味(38頁)では競合はあまりなく(⑤では全くなく)、文体的対立は完全とはいえません。
注13 形容詞(例 *akai* 赤イ)では不定形(*akasa* 赤ク)と語幹(*akai* 赤ク)の区別がはっきりしていますが、動詞ではその区別がありません。子音語幹動詞ではその区別があるように見えますが(例 語幹 *akaba*、不定形 *akaba*)不定形のように見えるのも語幹の音声化したかたちかもしれない(子音語幹は国語の音韻規則に従って音声化されねば語の中で具体化できません)。両者を外容から区別できません。ただし、形容詞とのパラレルが認められるものはその区別が或程度可能です。「連用止」、並列の用法は形容詞で不定形であるため、動詞でも不定形と考えてよいでしょう。美シクハアルから考えれば……ハ／モ／サエスルと結合するのも不定形といってよいでしょう。しかし、動詞に於て不定形は全て造語要素に転化し得ると考えておけば、不定形と語幹の音声化形の区別を論ずる必要は一応はないといえそうです。

- 注 14 岩波国語辞典では「ないではない」と注記し、前者を正則としているようです。
- 注 15 注 3 参。
- 注 16 音声記号は簡略表記です。例えばは [w] [u] など表記しわけず [u] で通します。
- 注 17 ことなる原則が働く「音便」については三 (I) (二) 「音便」参照。
- 注 18 i・e の前での非口蓋化子音と口蓋化子音の対立の消失は位置から独立した口蓋化子音が語幹末で使われぬため問題がおこりません。
- 注 19 国語に於て d が u の前で dz にかわり、d と dz は i の前で dʒ に変容するということとは厳密な意味では論証できません。言及できるのは u の前では普通 dz しかなく、i の前では dʒ しかないという事実だけです。
- 注 20 結合母音 i の存在は、s 語幹動詞で証明されます・kə:s, tɔ:s 借シタ。
- 注 21 例えば、いいきり法 (叙述法) 現在肯定の助辞は動詞で u、形容詞で i、体言 (形容動詞語幹) で da であり、それぞれ ϕ ・ ϕ という結合要素を持ちますが、先行品詞を表示するのは結合要素のみならず、それら助辞自身も行っていることになります・təbe:ru təbel, akai: 赤い, hōn da 本々, sidzuka:da 静カダ。
- 注 22 keo ケロとかたちがゆれるのは e 語幹動詞 (r は結合子音) とみまが われるためでしょう。
- 注 23 z ではなく dz。dz は母音間で閉鎖性が弱まることがありますが、純粹の摩擦音になるとはいえません。

文献（順不同）

- 宮田幸一『日本語文法の輪廓』。
金田一春彦 a『日本語音韻の研究』、b『日本語文法』、『世界言語概説』下。
鈴木重幸『日本語文法・形態論』。
清瀬義三郎則府『連結母音と連結子音と——日本語動詞無活用論』、『国語学』86。
松下大三郎『改撰標準日本文法』。
山田孝雄 a『日本文法論』、b『日本口語法講義』。

奥津敬一郎『生成日本文法論』。

松村明編『助詞助動詞詳説』。

国語学会編『方言学概説』。

梅原恭則編『助動詞』『論集日本語研究』7。

小泉保『日本語の正書法』。

城田俊 a 『へ／よ／う』の基本的意味『国語学』110、b 『助動詞の意味』

『国語学』117。

McCawley J. D., The Phonological Component of a Grammar of Japanese,

The Hague・Paris, 1968.

黒田成幸『言語の記述』。

石井久雄『日本語動詞の活用の音韻構造』（私家版）。

橋本進吉『国語音韻の研究』。

鈴木丹士郎『動詞の問題点』『品詞別日本文法講座』3。

ソシュール（小林英夫訳）『言語学原論』。

付記 本稿の英文要旨は、浪田克之介氏及び氏を通じてパトリシア ウェツ
ツェル氏に目を通して頂きました。記して感謝の意を表します。

〔Summary〕

The Grammatical Processes of the Japanese Verb

Shirota Shun

The purpose of this article is the strictly synchronic formal analysis of the conjugational pattern of present-day Standard Japanese.

Any Japanese verbal form comprehends a stem and a desinence (syntactical suffix). A stem may include a stem-suffix (derivational suffix), e. g. *tabe*+*are*, or be unsuffixed, e. g. *tabe*. Two types of desinential morphemes are to be distinguished ; a "final suffix" which can occur without being followed by another desinential suffix, e. g. *tabe*-*ru* ; a "postfix" which may be added to a final suffix, e. g. *tabe*-*ru* • *darō**R*. The stem-suffixes and final suffixes are divided into vocalic and non-vocalic. The vocalic suffixes begin with a vowel, e. g. *kak*+*are*, *kak*-*o**R*. The non-vocalic suffixes begin with a consonant, e. g. *tabe*+*na*-(*i*), *tabe*-*ta*, or consist of a zero, e. g. *tabe*. This dichotomy is the momentous principle of the Japanese conjugational pattern.

The vocalic suffixes have the juncture consonants and non-vocalic suffixes the juncture vowels.

In Japanese the following grammatical meanings (categories) are expressed by using stem-suffixes : voice, status, subject referent honorific and addressee honorific. Mood, tense, presumptive and evidential are expressed by using desinences.

The final suffixes are divided into (1) zero, and (2) real desinences—(a) monosyllabic and (b) polysyllabic—containing either two or three syllables. The infinitive, which carries the minimal grammatical information, has the zero desinence and the gerund, which expresses simultaneousness, has the three syllabic desinence.

The combination of final suffixes beginning with /t/ with the preceding consonantal stem is governed by the law of sandhi.

The appeal forms employ the vocalic desinences. In indicative moods vocalic desinences are used for unmarked forms (present and non-negative) and consonantal ones for marked forms (preterite and negative).

With relatively few exceptions desinences expressing negation have /n/ in the morphemes and /a/ as a juncture vowel.